

平成28年度

学力向上アドバイザー派遣事業

学力向上実践事例集

-教師の指導力の向上を目指して-

平成29年3月

栃木県教育委員会

はじめに

県教育委員会では、平成26年度から「とちぎっ子学力アッププロジェクト」を実施しています。本プロジェクトは、全員参加方式による「とちぎっ子学習状況調査」を要として、小・中学校9年間の学びの連続性を重視した本県独自の学力向上システムを構築し、児童生徒一人一人の学力向上に資することを目的としており、市町教育委員会の協力を得ながら各種事業を展開しています。

その事業の一つである、学力向上アドバイザー派遣事業は、学習指導及び組織マネジメント等について豊富な知識と経験を有する10名の学力向上アドバイザーを全公立小・中学校に派遣し、とちぎっ子学習状況調査等の効果的な活用や、学習指導における検証改善サイクルの構築・運用が促進されるよう各学校への支援を行うものです。平成26年度の本事業開始から3年間が経過し、今年度で県内全ての公立小・中学校534校に派遣を完了することになります。この3年間で、約2,700回の学校訪問を行い、学力向上に向けた学校の主体的な取組を支援してきました。

本資料は、学力向上アドバイザー派遣指定校で実践されている特色ある取組や、派遣後の学校の継続した取組を広く県内に紹介することで、各学校における学力向上に向けた取組の参考にしていただくことをねらいに作成しました。各学校の実情に応じて御活用ください。

最後に、本資料の作成に御協力いただいた学力向上アドバイザー派遣指定校及び関係市町教育委員会の皆様に深く感謝申し上げます。

平成29年3月

栃木県教育委員会事務局学校教育課長

宇梶 宏美

目 次

はじめに

I 資料の活用に当たって	p.1
II 実践事例	p.2
1 組織的な取組	p.2
・事例1 [小学校] 校内研修の充実を通して、全校体制で授業力の向上に取り組んだ事例	
・事例2 [小学校] 学校全体で「ねらいの提示」と「振り返る活動」の工夫・充実に取り組んだ事例	
・事例3 [中学校] 大規模校において、校内研修を工夫し、授業研究会を数多く実施することで、学力向上に取り組んだ事例	
・事例4 [小学校] 「学習と生活についてのアンケート」を活用し、個に応じた指導の充実を図った事例	
・事例5 [中学校] 自ら学び、進んで活動する生徒の育成を目指し、小中一貫教育に取り組んだ事例	
・事例6 [中学校] 共通した学校課題の下、小中連携を活性化させた事例	
2 授業研究会	p.14
・事例7 [小学校] 思考力・表現力等の向上を目指し、調査問題を活用した授業実践に取り組んだ事例	
・事例8 [小学校] 子どもの主体的な学びを育てる授業改善を図るために、学校全体で学習サイクルの確立と充実に取り組んだ事例	
・事例9 [小学校] 板書計画に基づく授業改善例	
3 学業指導の充実	p.20
・事例10 [小学校] 学業指導の充実を通じた学力向上の取組の事例	
III 資料	p.22
① とちぎの子どもの「確かな学力」向上のために 言語活動の充実を図る3つの提案	
② 学力向上アドバイザーからのメッセージ	
③ とちぎの子どもの『確かな学力』向上のために 平成28年度全国学力・学習状況調査結果から	
④ ③の資料を活用した校内研修例	

I 資料の活用にあたって

1 作成の目的

学力向上アドバイザー派遣指定校において実践されている特色ある事例や、派遣後の学校の継続した主体的な取組の事例を紹介することで、各学校が学力向上の検証改善サイクルの確実な構築・運用に取り組む際に役立てていただくことをねらいとして、本事例集を作成しました。

2 資料の構成

- (1) p.2～p.21には、学力向上の検証改善サイクルを構築・運用するとともに、教師の指導力の向上を図るための実践事例を掲載しました。
- (2) p.22～p.33には、県教育委員会が作成した資料や学力向上アドバイザーが学校を訪問した際に活用した資料を参考として掲載しました。

3 資料の活用例

- (1) 学力向上の検証改善サイクルの構築や円滑な運用を図るための参考資料とします。
- (2) 学力向上に関する諸計画及び資料を作成する際の参考資料とします。
- (3) 授業改善のための参考資料とします。
- (4) 校内研修などで、教師の指導力向上を図るための参考資料とします。

4 活用する際の留意点

- (1) 本資料では、検証改善サイクルの確実な構築・運用や授業改善を図るための取組を紹介していますので、学力向上改善プランの具現化のために、ぜひ参考にしてください。
- (2) 本資料に掲載されている事例は、当該学校の実態に即した取組です。自校への導入に当たっては、各学校の児童生徒の実態や家庭・地域の実情に応じて取組を見直したり、新たな指導内容を追加したりするなど、必要に応じ自校化を図ってください。
- (3) 児童生徒の学力向上を図るためには、学習の基盤となる学級を「学びに向かう集団」となるよう指導する必要があります。本資料とともに、県教育委員会が作成した指導資料「学業指導の充実に向けて」（平成24年3月）、県総合教育センターが作成した「学業指導の充実～子どもが意欲的に取り組む授業づくりを通して～」（平成26年3月）や「確かめよう学業指導」（平成27年3月）等を参考にしてください。
- (4) 本資料は、県教育委員会のホームページに掲載しています。学校及び関係機関においては、必要に応じてダウンロードして活用してください。

<http://www.pref.tochigi.lg.jp/m04/tochigikko.html>

また、本資料に掲載している資料を閲覧することができます。閲覧方法については、本資料と同梱された別紙資料「掲載資料の閲覧の仕方」で確認してください。

II 実践事例

1 組織的な取組

事例1 「小学校」校内研修の充実を通して、全校体制で授業力の向上に取り組んだ事例

■取組のポイント

- とちぎっ子学習状況調査結果の活用、授業づくりのスタンダードの作成・活用、「朝の学習」の実践など、全校体制で学力向上に組織的に取り組んだ。
- 思考力・判断力・表現力の育成を図るため、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた「学び合い」学習を重視した授業を目指し、研究授業などの校内研修を通して教師の授業力の向上に取り組んだ。

■学校の概要

本校は、市の中心部にあり、学区内には神社・資料館等の歴史・文化に縁の深い施設・文化財が多数存在している。学級数は、特別支援学級2を含め9学級、児童数209名の小規模校である。

本年度のとちぎっ子学習状況調査では、第4学年国語以外は県平均を上回っている。第5学年の結果は、前年度と比較して大幅に向上している。児童質問紙の結果から、書くことや読書、新聞を読む習慣、家庭学習に取り組む時間などでよい傾向が見られる一方、自己有能感に関する項目などに課題が見られる。

■取組の内容

1 全校体制の構築を目指した組織的な取組

(1) とちぎっ子学習状況調査結果の分析・活用

これまで本校では、NRT学力検査やとちぎっ子学習状況調査の結果について、教科・学年ごとにその成果と課題をまとめ次年度の授業改善に生かしてきた。本年度は、夏季休業中に、全教職員でとちぎっ子学習状況調査の分析を実施し、本校の強み（成果）と弱み（課題）を明らかにした。こうした取組を通して、全教職員で児童の学力の課題や学力向上に向けた具体策などの共有化が図られ、学校全体で取り組もうという意識を高めることができた。

また、調査結果の中で教科の学習内容の定着率が低い



とちぎっ子学習状況調査結果の分析

内容については、同一問題や類似問題を集めて「学力テストつまずき問題集」を作成し、授業や朝の学習の時間に活用している。

(2) 学力向上を目指す学校スタンダードの作成・実践

本校では、これまでも、授業の約束、話し方・聞き方などの学習のきまりをつくり、授業の中で児童への指導を行ってきたが、まだ十分に学校全体の取組となっていない面も見受けられた。そこで、改めてこれまでの指導を見直し、必要なことを加えるなど改善してき

た。以前は別々にあったものを一冊にまとめ、「□□小式 教師用 まなブック」と呼称して活用している。主な内容は、以下の通りである。

- □□小授業10か条
- 学習のきまり
- ノートの使い方について
- 話し方・聞き方の約束
- 家庭学習について
- 問題解決学習について
- 授業デザインについて
- いきいきタイムについて

この「まなブック」が、教師の授業づくりの取組の際の学校スタンダード（基準）となり、学校全体が同じベクトルで取り組むことができるようになってきている。

(3) 全教職員で取り組む「いきいきタイム」の実践

本校では、平成24年度から朝の学習の火曜日15分間を「いきいきタイム」として、全学級で国語・算数の学習に取り組ませている。以前は担任だけで指導していたが、個別指導が十分にできないということから、指導スタッフを担任と担任以外教員（校長・教頭・教務主任・学習指導主任・支援教員）の2名体制で行えるよう改善した。使用教材は、授業で使っているドリル類だけでなく、「とちぎの子ども基礎・基本」や「フォローアップシート」なども活用している。

これらの取組を通して、つまずきのある児童の発見ができたり、個別指導の機会が拡充したりするなどの成果が見られている。また、何よりも、教職員の児童理解が深まり、「全校で子どもたちの教育をしていこう」という一体感が醸成されつつある。

2 授業研究を核にした校内研修の取組

(1) 学校課題研究の取組

本校では、思考力・判断力・表現力の育成を目指し、「自分のよさを生かし、互いに学び合い高め合う児童の育成ーアクティブ・ラーニングの授業づくりを目指してー」を研究主題として学校課題研究に取り組んできた。



研究授業後の授業研究会の様子

そこで、校内研修の充実を目指して、研究授業の機会を増やし、要請訪問、

学力向上アドバイザー訪問で合計9回実施した。教職員一人当たり、2～3回の研究授業を行ったことになる。研究を進めていくうちに、「主体的・対話的で深い学びの授業づくり」に研究が焦点化していった。

以下、その研究内容の一端を紹介する。

主体的・対話的で深い学びの授業づくりの研究
導入⇒「学習課題（問題）」や「めあて」の吟味、難しい課題の設定
展開⇒子どもの自力解決、学び合いの設定（ペア学習・グループ学習等、学習形態の工夫）
教師のコーディネーター的な関わり
終末⇒振り返る活動の改善（振り返りの時間の確保、書くことによる振り返り）

ア 「学習課題（問題）」や「めあて」の吟味、難しい課題の設定

児童が主体的に自力解決に取り組み深い学びに至らせるために、導入で、児童に「どうしてなんだろう」などの「問い」が生まれるような学習課題を設定するよう工夫した。

イ 子どもの自力解決、学び合いの設定

全ての教室には、授業スローガン「学び合いみんなの力で問題解決」を掲示し、児童一人一人に授業で、互いに考えを出し合って問題を解決することを意識させる学習を行ってきた。授業展開の中で小集団をつくり、ペア学習を導入してきた



が、児童全員が時間内に解決できるように、グループ、学級全体で協力し合っ

ウ 振り返る活動の改善

これまで、振り返りの重要性は認識していたが、時間不足で十分に振り返りの時間を確保できずにいた。そこで、今年度は、展開の時間配分を考え、時間を確保するよう努めてきた。「授業デザイン」と呼ぶ学習指導案には、「『深い学びを実感した』と思われる子どもの姿」の欄を設け、授業者として本時の児童の学びのゴールを明確にして臨むようにしている。

算数4年単元名「およその数の表し方を考えよう」の授業では、次のように設定した。

『深い学びを実感した』と思われる子どもの姿

- 友達と対話しながら自分の分からないところを解決し、言葉や図、絵などを使って自分の考えをまとめている。
- 概数で表す場面が分かり、何万人と表すには1つ下の位に着目して概数にすると分かりやすいことが分かる。

こうした校内研修を通じた授業研究の取組により、「主体的・対話的で深い学びの授業づくり」を目指した実践が行われてきた。さらに、校内研修が刺激となって、普段の授業の中で、アクティブ・ラーニングの授業の具現化を図った取組をする様子も見られるようになってきた。

また、学力向上担当者（学習指導主任）は、少人数指導担当として多くの学級に担任と協同して児童の指導に当たってきた。このことで、各学級の児童の実態や学級の取組の様子が把握でき、結果として全体を見渡して校内研修を進めることができるようになってきている。

(2) 授業公開週間の実践

昨年度の3学期、校内の「授業公開週間」を試行し、成果が見られたので、本年度は、各学期1回ずつ年3回実践することにした。授業公開の目的は、全教員が授業を公開し、授業力の向上を図ることにある。授業公開後の研究協議は、同僚からのアドバイスなどから、日頃の自分の授業について見つめ直したり、同僚の指導観・子ども観に触れたりする、またとない機会となっている。

(3) OJTの実践

金曜日の放課後15分間、「〇〇タイム」として授業の悩みを自由に語り合う時間を設けている。学期末を除き、2週間に1回実施している。主務者は教務主任である。勤務経験の少ない若手教員にとっては、「悩みが晴れた」「視野が広がった」など、よい研修の機会となっている。これまでに、「めあてと学習問題の違い」、「問いのたせ方」、「学び合いのさせ方」などをテーマに実践してきた。職員室内で自由に、若手、ベテラン、時には管理職も一緒になって、率直に語り合う雰囲気ができており、同僚性の向上にもつながっている。

まとめ

- ◆ 学力向上を目指した全校体制を構築するためには、学力の実態や取組の方策などの情報を共有したり、協同的な取組を工夫したりしていくことが重要です。
- ◆ 教師の授業力の向上のためには、同僚性を高める校内研修を工夫し、日常的に実践していくことが大切です。

II 実践事例

1 組織的な取組

事例2 [小学校] 学校全体で「ねらいの提示」と「振り返る活動」の工夫・充実に取り組んだ事例

■取組のポイント

- 学習意欲の向上を目指したねらいの提示（ねらいの設定）の工夫と、学びの定着を図る振り返る活動の充実に取り組んだ。
- 改善プランの具現化を意識した研究授業と、全職員による低・中・高ブロックごとの授業研究会の充実を図った。

■学校の概要

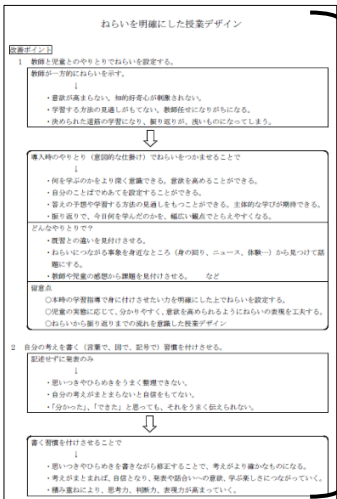
本校は、学級数30学級（特別支援学級を含む）、児童数900人超の大規模校である。児童の転出入が多く、また、在籍児童数の約1割は外国籍の児童である。

本年度のとちぎっ子学習状況調査結果では、4年生と5年生で結果の差が大きく、各教科とも5年生は、県平均を上回っているが、4年生は県平均に達していない。児童質問紙調査で両学年に共通して見られたのは、自己有用感、学習動機、達成感、学習計画力が予想以上に低く、また、話し合う活動や家庭での会話に関する質問項目でも、県平均と比べて5ポイント以上低かった。

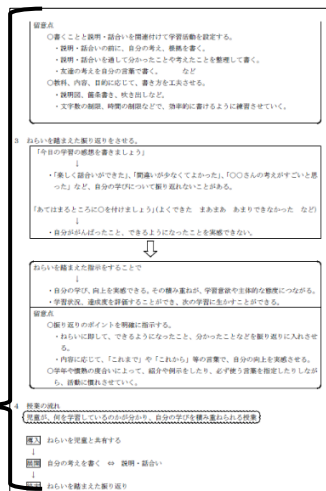
この結果を踏まえ、全校体制で児童の学習意欲の向上を図るために、学ぶ楽しさや達成感が味わえるような授業を構築しなければならないことを共通理解した。そこで、授業では、1時間の見通しがもてる授業のねらいを、児童個々に自分のものとして捉えさせるとともに、ねらいを達成するための学習活動を行い、児童自身が自分の成長を実感できるような振り返りを実践している。

■取組の内容

1 年度初めに、学習指導部から提示



児童が、何を学習しているのかが分かり、自分の学びを積み重ねられる授業の流れについて共通理解をしている。



「ねらいを明確にした授業デザイン」として、全校で共通して取り組む指針を周知している。

ねらいを明確にした授業デザイン

2 とちぎっ子学習状況調査結果分析、取組の重点化

(1) 全教師による調査結果の分析と具体策の検討

- ① 共通理解＝共通行動での活動のために、学力向上担当者が「何のために、何を、どのように行うのか。そして、最終的に何をを目指すのか」を具体的に周知（説明）



- ② 班（低・中・高）ごとにKJ法で検討
- ③ 各班の検討結果について、実践目標を意識しながら共有
- ④ 全校・ブロック・学年で重点的に取り組む課題を選定（共通理解）
- ⑤ 発達の段階、学年の特質を踏まえた具体策を検討し、教師個人の取組を確認



(2) 組織として重点的に取り組む内容の共通理解

「学力向上改善プラン」の各項目について、具体策の具現化を図るために、それぞれ1つに絞るなど、取組の重点化・焦点化を図った。

(1) 子どもの学び意欲・学習習慣

組織的・重点的な取組	課題	具体策
個に応じためあての設定、向上が実感できる振り返りをさせる。	めあてや振り返りをノートに書く習慣は付いてきた。しかし、意識調査を見ると、「ノートには、学習の目標とまとめを書いている」に比べ、「授業では、授業の目標が示されている」が、大幅に低くなっている。ノートに書いてはいるが、それぞれがしっかりとらえているとは言えない。「学習したことを振り返る活動をよく行っている」では、どちらの学年も県平均を上回っているが、自分の学びを深く見つめたり、自信を深めたりすることはできていない。	（めあて） ・関心を高める話題、問いかけ→めあての設定の順で ・既習内容、前時との違いからめあてを考えさせる。 ・生活場面と関連させてめあてをつかませる。 ・めあての個別化を図る。（みんなのめあて、自分のめあて、選択など） ・単元全体を見通した学習計画を児童とともに立て、ゴールを確認する。（振り返り） ・まとめの段階で学び合い、教え合いを設定し、自信をもたせたり、得意教科・分野を意識させたりする。 ・学年に応じて、書き方の指導を進める。（穴埋め→キーワード→自分の言葉 など） ・振り返りのポイントを明確に指示する。（めあてに戻って） ・どのように活動して、何ができた（分かった）のかを振り返らせる。 ・それぞれのがんばりを認め合ったり、教師から賞賛したりする。 ・次時への学習意欲につなげられる活動にする。

各項目について、それぞれ取組を1つに絞って重点化・焦点化を図る

取組の重点化・焦点化を図った「学力向上改善プラン」の作成

学力向上改善プラン

3 授業での実践

(1) 大規模校の特質を生かした実践

- ① 単元全体を見通したゴール、展開の仕方の共有
- ② 教師個々のアイデアを、学年で作成、活用
- ③ 学年（学級）で作成した教材の共同利用・検証
- ④ 授業力向上のために全学級担任の授業公開
- ⑤ 専科教員＋学級担任によるTT指導（算数）の実施

(2) 第1回研究授業、授業研究会（10月）

1年・4年・5年で算数の研究授業を実施した。全教師（70名）が3グループに分かれ、学年主任がファシリテーターとなり、成果・課題・改善点について検討した。その後、全員で具体策の修正や追加を行った。研究会後に全員が組織として取り組むために「今後、心がける点」と題して、成果の確認と実践の徹底を促した。



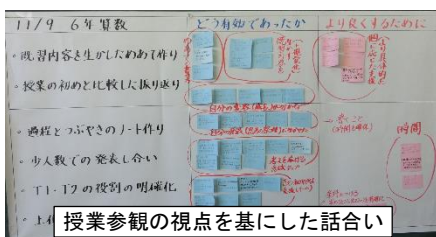
2 今後、心がける点（授業）

- めあて設定の段階で、課題を解決する必然性、必要感をもたせる
 - ・ 「あれ？、できない」困り感→「なんとかしよう」「できるようにしたい」
 - ・ 生活場面の活用が有効
 - ・ 1時間を見通せるめあて
- 振り返りまでしっかり行える時間配分
 - ・ ねらいを絞って、広げすぎない、欲張りすぎない。
 - ・ それぞれの学びの時間の進行状況に合わせた即時的な時間変更（できていれば早めに切り上げる）
 - ・ 時間がないときは、キーワードの提示等も考える。
- 視覚に訴える教材・教具、具体物操作をねらいに応じた運用
 - ・ ねらいをとらえさせる、考え方のものにさせる→有効
 - ・ 自分の考え方をまとめさせる→じゃまになること、ヒントを与えすぎることがある
- めあての設定、考えさせる場面でかける言葉の精選
 - ・ 反応を予想して、短い言葉で、ポイントを絞って
- 見通しをもたせた上で考えさせる
 - ・ 特に算数の新しい学習内容で有効
 - ・ 答えの見通し、やり方の見通し

成果の確認と実践の徹底のための「今後、心がける点」

(3) 第2回研究授業、授業研究会（11月）

2年で国語、3年・6年で算数の研究授業を実施した。指導案に学力向上改善プランの具現化の実践として「学力アッププロジェクトに関わる授業の視点」を明記した。また、授業参観の視点にするとともに、研究会での話合いがより焦点化できるようにした。



【授業参観の視点の例】…学力向上改善プランの実践

- 2年生…前時の振り返りでの意欲付け
 - 【国語】「穴うめ形式」でのねらいの設定
 - 「日記形式」での振り返り
- 3年生…他教科の学習を生かした意欲付け
 - 【算数】児童との対話を通したねらいの設定
 - 適用問題を使った振り返り
- 6年生…既習内容を生かしたねらいの設定
 - 【算数】授業のねらいを踏まえた振り返り

(4) ねらいの設定と振り返りの取組例

- ① 1年生
 - ・ 児童との対話の中から、ねらいを設定する。
 - ・ 初めは、振り返りを口頭で発表させ、慣れてきたらノートに書かせるようにする。
- ② 2年生
 - ・ 初めは、穴うめ形式でねらいを示すことにより、少しずつ自分で考えられるようにする。
 - ・ 日記形式の振り返りを、次時の導入で発表させることで、ねらいの設定に生かす。
- ③ 3年生
 - ・ 問題提示後に児童から出てきた言葉を使ったり、前時の振り返りにおける児童の発言を基にしたりしながら、本時のねらいを設定する。
 - ・ 何が分かり、生活の中でどう活用できるかという観点をはっきりさせて振り返りを行う。
 - ・ 振り返りをまとめて、教室内に掲示する。

重さ① ふりかえり

児童の振り返り	先生のコメント	授業の振り返りを教室内に掲示
「やめた、できなかった、もう一度やってみよう！」	「やめた、できなかった、もう一度やってみよう！」	「やめた、できなかった、もう一度やってみよう！」
「この問題、どうやって解いたらいいかわからない。」	「この問題、どうやって解いたらいいかわからない。」	「この問題、どうやって解いたらいいかわからない。」
「この問題、どうやって解いたらいいかわからない。」	「この問題、どうやって解いたらいいかわからない。」	「この問題、どうやって解いたらいいかわからない。」

先生のコメント

授業の振り返りを教室内に掲示

- ④ 4年生
 - ・ 児童の実生活と結び付け、自分でねらいを設定できるような課題を提示する。
 - ・ 振り返りの場面で、授業のねらいを再確認する。
- ⑤ 5年生
 - ・ 前時までと本時の学習内容の共通点や違いを意識させる。
 - ・ 掲示資料を活用した既習事項を確認する。
 - ・ 振り返りを次時の導入に生かす。
 - ・ 家庭学習でも、学習内容に関するねらいの設定や振り返りを実践する。
- ⑥ 6年生
 - ・ 既習事項を生かし、児童の発言を取り上げながらねらいの設定を行う。
 - ・ 授業の初めと比べて自分の変容が実感できるような振り返りを行う。
 - ・ 次時にやってみたいことも振り返りで書かせる。

まとめ

- ◆ 児童がねらいを自分のものとして捉えることで、学習に見通しをもち意欲的に授業に取り組むことが期待できます。
- ◆ ねらいに沿った振り返りを様々な工夫を行うことにより、児童の学びの定着を図ることが期待できます。
- ◆ 全校体制での研究授業・授業研究会を充実させ、成果を共有し自分のものとして意識することにより、組織力・教師力の向上が期待できます。

II 実践事例

1 組織的な取組

事例3〔中学校〕 大規模校において、校内研修を工夫し、授業研究会を数多く実施することで、学力向上に取り組んだ事例

■取組のポイント

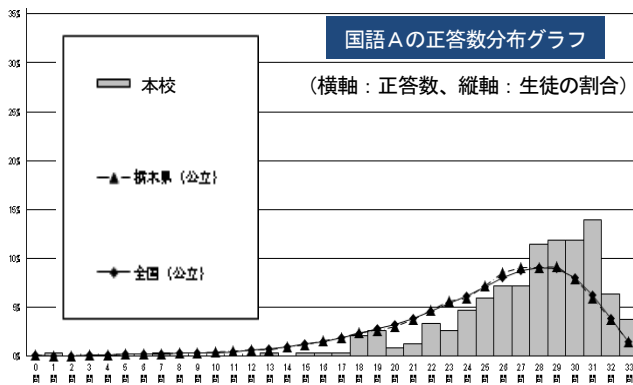
- 大規模校において、教職員が自ら学ぶ研修会を工夫し、無理なく学力向上に向けた取組を実践した。
- 学力向上に向けた取組を評価・改善するPDCAの確実な運用を基本としている。

■学校の概要

市の中心部に位置し、生徒数約735名、学級数25学級（特別支援学級を含む）の大規模校である。ここ数年で急激な生徒増となり、教育環境としては厳しい状況である。このような状況の下、全国学力・学習状況調査においては、表1に示すように全ての調査で全国平均を上回っている。グラフは、国語Aの正答数ごとの生徒の割合について、本校と県、全国を比較したものである。

表1 平成28年度全国学力・学習状況調査の結果
【全国平均との比較 ○：平均以上、◎：10ポイント以上】

国語A	国語B	数学A	数学B
○	◎	○	○



大規模中学校は、教職員の人数が多いため、学校全体で授業参観したり、全員参加での研修会を充実させたりすることが難しいのが現状である。したがって、生徒の学力向上のために教師の指導力を高める取組は、各教科部会等で行われることが中心であり、学校全体での組織的な取組には研究の余地があった。

本校は、学力向上に向けた様々な取組を実施しているが、その中でも、これまで学校全体で実施する授業研究会を改善しながら継続することで、教師の指導力を高めてきた。その結果、学力調査で高い正答率の維持はもちろんのこと、地域や保護者の高い信頼を得ることもつながっている。以下にそれらの実践の概要を述べる。

■取組の内容

1 授業公開の研修計画とその変遷

本校における他教科の教師が授業を参観する研修は、平成21年度にスタートした。それを進めるに当たり、

学校組織の役割分担（校務分掌）を、学力向上を進めやすくするため、学年横断型のプロジェクトチームを編成した。そこでは、トップダウンではなく、教員からの実践可能な提案が期待された。

大規模校で、全ての教科の教員が参観できる授業研究会を行うには、いくつか乗り越えなくてはならない課題があった。例えば、研究授業のクラス以外の生徒を下校させることや、50人以上の教員を1クラスに集めて授業参観することは現実には難しい。そこで、本校では、教員を3グループ（グループは、全教科の教員で構成）に分け、1グループごとに研究授業を実施することにした。このシステムを導入したことにより、2/3の教員が授業を行うことで、他の生徒の授業を欠けさせることなく、研究授業を行えるようになった。グループごとに研究会を数回実施し、同じグループのメンバーが研究授業を参観し、授業研究会を行う。本校は、今日までこれを改善しながら、継続して実践している。

2 今年度の取組の様子

本校の主な取組の特長は、学力調査等による生徒の課題を把握して、その改善に向けた取組を企画・検討する学校全体での研究会と、それを実践する3グループによる研究会の2つの組織的な取組である。

(1) 授業公開と参観計画

	Aグループ	Bグループ	Cグループ
1年	国語① 数学① 英語① 音楽① 体育①	国語② 理科① 英語② 体育② 特支①	数学② 理科② 英語③ 体育③
2年	社会① 数学③ 理科③ 英語④	国語③ 数学④ 英語⑤ 体育④ 家庭①	国語④ 社会② 英語⑥ 技術① 特支②
3年	国語⑤ 数学⑤ 英語⑦ 家庭② 特支③ 社会④	社会③ 数学⑥ 理科④ 美術① 特支④ 社会⑥	国語⑥ 数学⑦ 音楽② 体育⑤ 社会⑤ 理科⑤

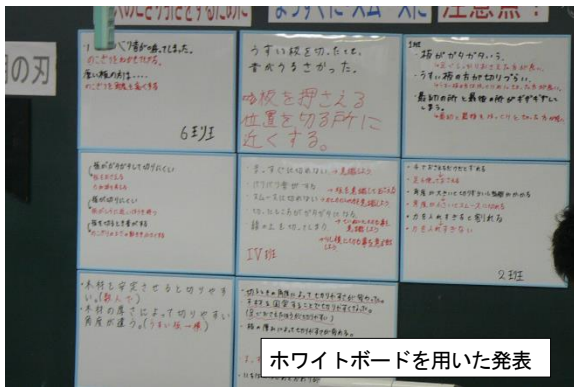
※ 国語は①から⑥までであるが、これは国語科の教員が6名いることを表している。

表2 授業参観のためのグループ

表2のように、授業者46人をA～Cの3グループに分け、1グループを15人程度とする。各グループの公開授業では、グループのメンバー5～7人が授業参観を行う。



技術科の研究授業の様子



ホワイトボードを用いた発表

グループの中で、一つの研究授業の授業者に対し、参観する教員が割り当てられている。このシステムにより、全教員が公開する授業については、必ず参観する教員がいて、授業参観後、気が付いた点や意見をアドバイスができる。このことにより、本校は、全教科で質の高い授業を実現しようとしている。

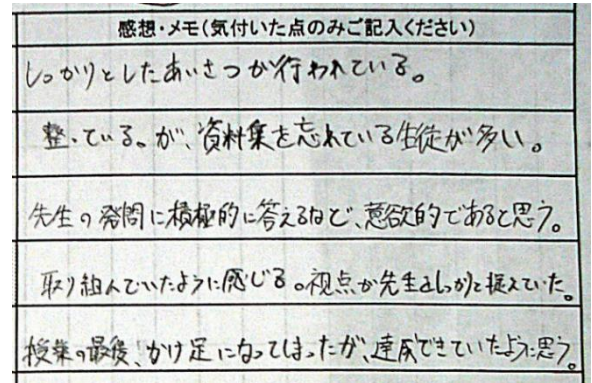
(2) 教師の指導力向上のためのチェックリストの活用

教師の指導力の向上には、参観した授業について、いかに良いアドバイスを与えるかという授業者へのリターンが大切になる。年間数回の授業研究会では、この時間を確保し、充実させているが、ほぼ全員が実施する授業に対しては、写真に示すような授業参観カードを利用して授業者に提供している。



授業参観カード

授業参観カードには、生徒の学習の様子と教師の指導の様子の2点について、「本時のねらいを明確に提示しているか」、「考える場が設定されているか」などの観点項目があり、参観者は、それに基づき、気付いた点を記述している。



授業参観カード 実際の記入の様子

(3) 学校全体で研究会の工夫

3グループの歩調を合わせたり、それぞれの研究会を充実させたりするために、年間数回実施する全体での研究会は欠かせない。そこでは、管理職や担当者が方針や連絡事項等を伝えることや、指導主事や外部訪問者からのアドバイスを大切にしている。また、学力調査問題の検討や結果の分析等についても、全体での研究会で実施している。

(4) 3グループと全体との連携

本校では、授業実践を3グループに分けて実施しているため、授業実践する3グループと推進グループ（管理職、担当者）の連携を密にすることが必要である。そこでは、取組の進捗状況の把握や修正・改善のため、各グループの情報を確認したり、実践に向けた提案を各自が理解したりするための全体研修を充実させることが大切である。また、取組の成果を常に把握することで、成就感をもちながら取り組むことが大切である。

まとめ

- ◆ 大規模校で授業研究を充実させるには、教科の壁を低くした組織の在り方など、工夫改善が必要です。
- ◆ 授業研究会を質・量とも充実させるためには、参観者が1時間全部の授業を見られることや、研究授業以外の授業が欠課や自習にならない工夫が必要です。
- ◆ 常に、教師の負担や成就感を確認することが大切です。

II 実践事例

1 組織的な取組

事例4 [小学校]「学習と生活についてのアンケート」を活用し、個に応じた指導の充実を図った事例

■取組のポイント

- 全教職員が「安心して学べる学級」「分かりやすい授業」について話し合い、取り組む方向性の合意を図った。
- 「学習と生活についてのアンケート」を年5回実施し、これを踏まえて学級経営と授業改善の方針を作成し、個に応じた指導の充実を図った。

■学校の概要

市の中西部に位置する小規模校である。学区は自然に恵まれた田園地帯にある。祖父母と同居する児童の割合も多い。昨年度、インクルーシブ教育の研究を行うとともに学力向上改善プランとの整合性を図り、児童一人一人の学びに目を向けた実践を行っている。

平成28年度全国学力・学習状況調査の結果は、全ての教科において全国平均正答率を上回っていた。特に、国語A、算数A・Bにおいては10ポイント以上高い。

また、とちぎっ子学習状況調査においても、小学校5年国語以外の教科で県平均正答率を上回っている。

■取組の内容

1 「学習と生活についてのアンケート」(以下、「アンケート」とする) 実施に向けて

(1) 学力向上に関する学校の基本的な考え方

児童の学力向上を目指す上で、「安心して学べる学級」「分かりやすい授業」づくりは重要な視点である。

そのため、全教職員が、その視点に基づき、同じ方向を向いて実践を進めることが大切である。

また、学力向上は学校生活だけでなく、家庭における生活の状況も重要であることから、保護者の理解・協力を得ながら、学校として取り組んでいく必要がある。

そして、その実践を進めるときには、児童も自らPDCAを回して学力向上を目指すという学力アッププロジェクトの目標である「主体的な学びの確立」を意識させなければならない。

(2) アンケートを実施するに当たって

学びの主体が児童一人一人であることを踏まえれば、児童の見取りを適切に行い、いかに具体的な支援をするかを考えなければならない。

そこで、本校では「学習と生活についてのアンケート」を作成・実施し、児童の実態を把握するとともに、個に応じた指導の充実を図ることとした。また、アン

ケート結果を基に、保護者への望ましい生活習慣等の啓発をするとともに、保護者と連携を密にし、児童の生活習慣等の改善を図ることとした。

2 主な実践

(1) アンケートの作成と実施・集計等

① 作成について

アンケート作成に当たっては、とちぎっ子学習状況調査の本校の調査結果から見られた課題を参考にするとともに、全教職員が「安心して学べる学級」「分かりやすい授業」とはどういうものかについて、具体的に意見を出し合い、本校が目指す方向性を確認しながら、学習や生活に関する内容を検討した。

学習と生活についてのアンケート		年
1	それぞれの時間の授業の「ねらい」がわかりますか？	
ア	わかる	イ だいたいわかる
ウ	あまりわからない	エ わからない
2	授業のおわりに、学習したことを振り返っていますか？	
ア	ふり返っている	イ だいたいふり返っている
ウ	あまりふり返っていない	エ 振り返っていない
3	ノートを、ていねいに書いていますか？	
ア	ていねいに書いている	イ だいたいていねいに書いている
ウ	あまりていねいに書いていない	エ ていねいに書いていない
4	ノートに、自分の考えやその理由、感想などを書いていますか？	
ア	書いている	イ だいたい書いている
ウ	あまり書いていない	エ 書いていない
5	授業中、進んで発表していますか？	
ア	進んで発表している	イ だいたい進んで発表している
ウ	あまり進んで発表していない	エ 進んで発表していない
6	学校で勉強をすることは、楽しいですか？	
ア	楽しい	イ まあまあ楽しい
ウ	あまり楽しくない	エ つまらない
7	週に何回くらい、家で日記や作文を書いていますか？	
ア	毎日書いている	イ 4~6回書いている
ウ	1~3回書いている	エ 書いていない

「学習と生活についてのアンケート」シート ※一部抜粋

② 実施、集計等について

アンケートは年5回(5, 7, 10, 12, 3月)全児童を対象に行う。学級担任が集計し、学年(学級)の状況を把握するとともに、心配される回答のあった児童には昼休みや放課後を使って話し合いを行う。状況によっては、補充的な学習指導をしたり、家庭への連絡をとり、保護者と連携したりして進めている。3月の調査結果は、次年度の学級担任に引き継ぎ、個に応じた指導の充実に生かしている。

(2) 「学習と生活についてのアンケート」の活用

① アンケート結果を基にした授業改善

「目指そう！ステップ・アップ」という教員のPDCAサイクルシートにアンケートからの成果と課題を記入し、次回アンケートまでの具体策を立て、日々の授業実践や研究授業を行う。

特に、「分かる授業」に関しては「ねらい」「振り返り」「自分の考えや理由を書く」について、年間一人4回の研究授業を通して検証を行う。

目指そう！ステップ・アップ その4

* 「目指そう！ステップ・アップ その4」への取組です。
 * 1学期末の「学習と生活についてのアンケート」集計結果を生かして、各学年とも一歩一歩ステップ・アップを図っていきましょう。
 * 下の設問、対策等に簡潔に記入していただき、PDCAマネジメント・サイクルを生かして、ステップ・アップを目指しましょう。

6 学年 記入者 _____ 記入日12月21日

*アンケート結果集計に見られる学級（学年）の強み（簡条書きで2～3点）
 ・ノートへ理由や感想を記入している。
 ・「およはようございます」のあいさつをきちんとしている。

*アンケート結果集計に見られる学級（学年）の弱み（簡条書きで2～3点）
 ・寝る時刻や起きる時刻がだんだん遅くなっている。
 ・「丁寧にノートを書く」の項目が低い。
 ・「家庭学習の頻度」の項目が低い。

*学年末までにステップ・アップを図りたい事柄（簡条書きで具体的に1点）
 ・「家庭学習の頻度」の項目を、10ポイント以上向上させる。

*ステップ・アップを図るための具体策（簡条書きで1～2点）
 ・家庭学習の時間が一日平均70分から80分という児童が多いので、あと20分学習に取り組みようと呼びかける。
 ・中学進学を意識し、自主学習の量を増やすようアドバイスする。宿題を含めた家庭学習に積極的に取り組めない児童がいるので、その子にあった宿題を出すようにする。また、家庭に協力を求める。

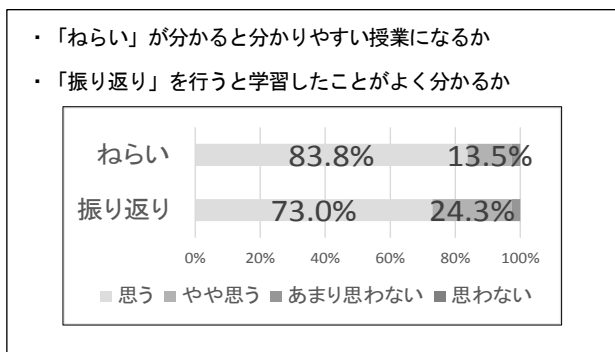
(・K児は家庭学習にあまり意欲的でなく、家族からのチェックを行ってもらえない状況が続いているので、「中学進学に向けての心構えや課題」について、個別的にも指導と支援をして、家庭にも協力を求めながら、中学校進学に備えられるようにしていく。)

*「ステップ・アップ その3」の達成状況を踏まえた成果と課題
 ・「進んで発表する」項目を前回よりも15ポイント以上向上させ、80ポイント以上にする目標であったが、79.2ポイントであり、目標値まで達成しなかった。しかし、目的に応じてペア学習や6人での話し合い活動などを意識的に取り入れてきたことで、意欲的に発表する児童が増えてきた。それでもなお人前で発表に苦手意識がある児童がいるので、「言葉での発表」という形だけにこだわらずに、図や絵を描くなどの本児の得意な方法で自分の考えを相手に伝えられるように指導したい。

(・K児については、「合理的配慮」という面からも中学校生活に円滑に臨めるように、特に意欲や心情面で安定できるよう指導と支援を続けていく。)

「目指そう！ステップ・アップ」シート例

また、今年度、学校全体で授業改善に向けて取り組んできた「ねらいの提示」「振り返る活動」に関する以下の内容について、第4学年以上の全児童を対象にアンケート（12月実施）を行った。



アンケート(12月実施)結果

[児童の感想]

- ・「ねらい」がないと、ぜんぜん何をやるか分からないので、分かりやすい授業をするためには「ねらい」が必要です。（6年児童）
- ・「振り返り」をすると、できなかったら自主学習できるからいいです。（4年児童）

② アンケートを基にした保護者との関わり

全校のアンケート集計結果等を明記した通知とともに、各児童のアンケート用紙を、全保護者に返却している。その際、全校の結果や各児童の前回調査等を参考にしながら、成長の確認や課題の解決に向けて話し合っていたくようにお願いした。また、学級担任は各児童が改善できていることや課題が明確になるよう個別のアドバイスを工夫した。

3 成果と課題

児童一人一人を生かし伸ばすために、複数の手立てで把握し、関わり続けてきた。また、アンケート結果を踏まえ、授業や学級経営に取り組んだことにより、教員も児童、保護者もやるべきことを意識化でき、具体的実践が見られた。今後は、アンケート項目を精選するとともに、児童の主体性という点から個別支援の方法や内容を工夫する必要がある。

4 教員の感想

「学習と生活についてのアンケート」を通して児童の素直な気持ちを受け止めたいと考えている。授業のねらいが分かるか、進んで発表しているか、勉強は楽しいかなど、アンケート調査結果を参考にしながら教材研究や発問の仕方、日常的な関わりを工夫するように心がけている。

まとめ

- ◆ 学力向上のために全教職員で取り組むべきことを話し合い、「合意項目」をつくり、それを継続して実践したことが成果につながっています。
- ◆ 教員自ら振り返る視点を定め、年間5回児童からアンケートを得て、授業や学級経営、保護者啓発を見直したことで、個に応じた指導の充実が図られています。
- ◆ アンケート調査結果を踏まえ、個に応じた指導の充実を図ることが、児童の学習意欲の向上や望ましい生活習慣の確立につながります。

II 実践事例

1 組織的な取組

事例5 [中学校] 自ら学び、進んで活動する生徒の育成を目指し、小中一貫教育に取り組んだ事例

■取組のポイント

- 小・中の連続性を大切にし、自分の考えを伝える力を高めるための指導法を工夫した。
- 中1ギャップ解消や学力向上を目指した小中一貫教育に取り組み、中学校区スタンダードを作成した。
- 中学生としての自覚と誇りをもたせるための取組を工夫した。(行事や活動・生活ノートの活用等)

■学校の概要

広大な田園が広がり、酪農農家も点在する農村地帯に位置する中規模校である。

明るくまじめで素直な児童が多く、挨拶などの生活習慣や家庭学習への取組はおおむね良好であるが、自己表現や意見発表などはやや消極的である。

学区の小学生の学力は平均的だが、中学校入学後の学力向上には一定の成果が見られる。特に、H27、H28のとちぎっ子学習状況調査結果は、社会・数学・英語で県平均正答率を大きく上回っている。

■取組の内容

1 小・中の連続性を重視した指導計画の見直し

- 国語 (辞書の活用、語彙獲得)
- 英語 (振り返りカードの統一: 乗り入れ授業) [資料1]
- 数学 (図形単元の系統性を踏まえた指導例) [資料2]
- 算数 (並べ方と組み合わせ方: 乗り入れ授業) [資料3]

資料1「2年英語・Lesson 6 My Dream」(乗り入れ授業)

<単元の系統性>

- 小6 **中学校でしたいことは? 何になりたい?** → 中2 **L6 My Dream**
→ 中3 **L6 I have a dream**

<研究課題との関連>

- 小学校で育んだ英語の素地を生かして、英語で自分の考えや思いを伝えることができる生徒を育成すること。

<小6・英語活動>

区 分	授業の活動	教師の活動・支援
タイトル (2分)	中学校でやりたいことを知っている英語を使って伝え合う。	
目標 (3分)	What do you want to do in junior high school? I want to ~	
W (5分)	あひさつをする。 Aの質問に一言で答える。 歌を歌う。 When I Grow Up	教師の活動・支援 A: 1-1のゲームカードの質問をする。 B: 1-1の質問カードを配る。 B: 1-1の質問カードを配る。
インタビューゲーム (20分)	中学校でやりたいことについてインタビューゲームを行う。 1. 自分がやりたいことを考え、ペアで会話の練習をする。 2. インタビューをする。 A: 互に質問カードをしながら、先輩1人一人にやりたいことを尋ねる。 B: 互に質問カードを配る。 A: 互に質問カードを配る。	教師の活動・支援 教師: 記録カード等を配布する。 A・B: 質問カードを配る。 A・B: 互に質問カードを配る。 A・B: 互に質問カードを配る。
F (5分)	授業を振り返る。 あひさつをする。	教師の活動・支援 H: 振り返りカードを配布する。 A・B: 振り返りカードを配る。

小学校6年生での会話活動が、中学校2年生の言語活動(書く・話す)に繋がっていることが分かります。

<生徒の感想>

- I want to~という不定詞の使い方をきちんと覚えられた。
- 自分で文は作れたが、発音を聞き取ることが難しかった。

資料2「2年数学・平行と合同」

<単元の系統性>

- 小4 **直線の垂直や平行**
小5 **図形の合同**
小6 **対称な図形** → 中1 **平面図形 空間図形**
中2 **平行と合同**
三角形と四角形
中3 **相似な図形**

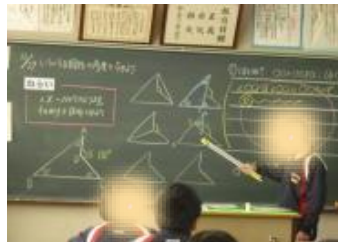
<課題研究の視点>

- ① 「一人学びの時間」を設定すること
- ② 学び合うことによって考えを深めていくこと
- ③ 身の回りの事象や発展的な課題に対して数学的に事象を捉えること

<課題把握・展開>

時間	学習活動	教師の支援および留意点
5	・ 既習事項を確認する。 ④の角の図を見て、4つの角の関係を考え、(1)課題を把握する。 【課題研究の視点①】	・ 既習事項のうち、平行線の性質、三角形の角の性質が本時の授業に大切であることから、内角・外角・同位角・錯角についてはしっかりと押さえておく。 ・ 点A、B、Cは生徒と一緒に記述することで意識付けをする。
	【課題把握】 右の図で、 $\angle x = 110^\circ$ になります。その理由を考え、いろいろな方法で説明してみよう。	

<考え方を説明する生徒>



考え方を説明することで、思考力・判断力・表現力がより深まります。

資料3「6年算数・並べ方と組み合わせ方」(乗り入れ授業)

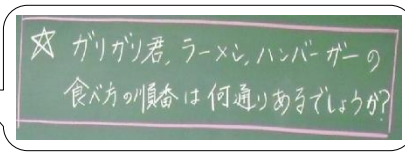
<単元の系統性>

- 小6 **並べ方と組み合わせ方** → 中2 **確率**
中3 **標本調査**

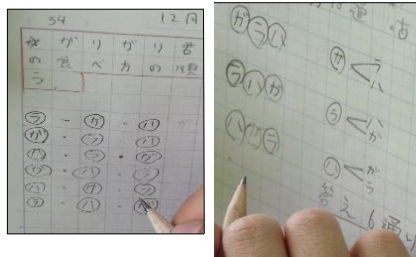
<課題把握>



<板書拡大>



<ノート・考え方>



<学び合いの様子>



各自の考え方を記入させることで、思考の過程を確認できます。

2 確かな学力を身に付けさせるための取組

- (1) 授業づくり
 - ねらいを明確にした授業づくり
 - 集団学び、個に応じた指導、体験的学習の充実
 - 互いに高めあえる学級づくり（学業指導の充実）
- (2) 学習環境の整備
 - 教室環境
 - チャイム着席
 - 教室移動
- (3) 学習習慣の育成
 - 学習の約束
 - 発表のきまり
 - 授業と家庭学習の一体化

3 中学校区スタンダードの作成と実践 [資料4]

- 「テーマ・めざす子ども像」の設定
- 小・中でつなぐ「学習の約束」
- 小・中でつなぐ「生活のきまり」

資料4 「〇〇スタンダード」

3 小・中でつなぐ〇〇スタンダード

(1) 学習の約束



(2) 生活のきまり

年齢	あいさつ	返事・言葉遣い	整理整頓	時間を守る
1, 2年	大きな声であいさつができる。	「はい」と元気な返事をし、「すみません」を使うことができる。	きちんと自分のものをしまうことができる。	チャイムの合図で行動できる。
3, 4年	自分から大きな声であいさつができる。	「はい」と元気な返事や「です」「ます」を使うことができる。	身の回りの整理整頓が進んでいくことができる。	協力して時間を守ることができる。
5, 6, 7年	自分から気持ちのよいあいさつができる。	「はい」とはっきりした返事や相手に応じた言葉遣いができる。	身の回りの整理整頓が進んで継続してできる。	時間を意識して行動できる。
8, 9年	時と場に応じた態度で、元気なあいさつができる。	相手の意思を持つはっきりとした返事をし、場に応じた言葉遣いができる。	他の人を思いやり、創意工夫して整理整頓ができる。	次を聞き取り、余裕を持って行動できる。

4 中学生としての自覚と意識改革

- 行事等（入学式・歓迎会・生徒会・清掃・運動会等）
- 生活ノートの活用（生徒心得・学習計画表等）【資料5】
- 週末課題や学習計画表の活用（テスト前学習等）

資料5 「学習計画表」

各自の計画や実践を適切に評価する励ましのコメントが生徒の意欲を高めます。

5 取組後の教員の感想

- 乗り入れ授業（数学、英語等）
 - ・9年間の学びを繋げることで、生徒の「つまずき」が見えるようになり、小学校の既習事項を利用した導入や系統性を考えた授業展開ができるようになった。
 - ・ペア学習やグループ学習で話したい場面を設定し、思いや考えを伝える活動を多く取り入れることができた。
- 授業づくり（ねらい、振り返り、学び合い等）
 - ・一人学びの時間を確保し、学び合いを行うための補助シートを配り、自分の意見をまとめさせた。
 - ・振り返りやまとめの習慣を付けていかないと、教員はやらせたつもりでも、生徒にその実感がないことがあるので、教師自身も評価を意識していく必要がある。
- 学習環境の整備（教室、チャイム着席、教室移動）
 - ・帰属意識や規範意識が高く、互いに高め合える学級づくりを通して、学びに向かう雰囲気が向上した。
- 学習習慣の育成（学習の約束、きまり、家庭学習等）
 - ・話合いの約束事として、相手の発表が終わるまで静かに聞く、自分の意見をもち相手に伝えることを徹底した。
 - ・毎日10分程度の課題を出し、学習習慣を付けさせるとともに、きちんと評価して学習意欲を高めた。特に、授業と家庭学習の一体化を図ることが学力向上に有効であった。
- 生活ノート、週末課題
 - ・漢字や単語の意味調べ、辞書を活用する活動を支援した。
 - ・週明けに適切な助言や評価をすることで、基礎学力の向上と家庭学習の習慣化に役立った。

まとめ

- ◆ 教科ごとに単元の系統性を意識して授業研究に取り組むことにより、小・中学校9年間を見通した指導が行えるようになります。
- ◆ 相互乗り入れ授業を通して、小・中学校教員の交流が深められるとともに、小学生にとっては中学校進学への不安を和らげることができます。
- ◆ 中学校区スタンダードの実践を通して、小・中学校教員が共通理解のもと、生活習慣や学習規律について9年間の連続性を大切にしたい指導ができます。
- ◆ 各種行事や生徒会活動等を通して、中学生としての自覚と誇りを意識させることで、自主性や学習意欲が高まり、学力の向上が期待できます。

II 実践事例

1 組織的な取組

事例6 「中学校」共通した学校課題の下、小中連携を活性化させた事例

■取組のポイント

- 小・中学校合同で研究授業・授業研究会を行い、授業改善や教員の指導力向上に取り組んだ。
- 学校長の強いリーダーシップの下、教育課程の工夫や様々な学力向上の取組を生徒の視点に基づいて取り組んだ。

■学校の概要

単学級の小規模校で、小中一貫教育を推進して8年目、また、市から小規模特認校に指定されて2年目の中学校である。「生徒が輝く日本一の小規模校」を合い言葉に、学校長の強いリーダーシップの下、全教職員が協働して全校生徒を丁寧に育てている。

平成28年度とちぎっ子学習状況調査の教科に関する調査の結果は、おおむね県平均と同程度である。

■取組の内容

1 小中一貫教育の推進に向けて

(1) 基本的な考え方

「ふるさとを愛し『生きる力』を育む小中一貫教育～将来なりたい自分になるために～」を基本理念として、「学力をつける」「心を育てる」「体力をつける」ために、小・中学校や地域と連携したキャリア教育である「生き方教育」を行うことで生きる力を育成することを目指している。

(2) 共通した学校課題の設定

今年度は、特に「学力向上」を重点課題とし、年間10回の小・中学校合同研修会を開催している。小・中学校で共通した学校課題「思考力・判断力・表現力の育成を目指した学習指導の工夫・改善～アクティブラーニングの推進を通して～」を設定し、その課題解決に向けて協働で取り組んでいる。

2 主な実践

(1) 小・中学校合同研究授業・授業研究会

授業を見せ合うことで指導力の向上・授業改善を目指した小・中学校合同研究授業・授業研究会は、今年度、小学校で3回、中学校で3回実施をした。

それぞれの研修会では、小・中学校の全ての教員を3班に分け、授業において、どのグループの児童生徒の学習の様子を観察するかを班ごとに決め、どのような視点で授業を参観するかを示した「授業の視点」を共有して、研究授業に参加している。

今年度の研修会において設定した「授業の視点」の

例を以下に述べる。

【数学】第1学年 正負の数の利用

～時差を表そう～ (24/27時間目)

- ① 授業のねらいを生徒とのやり取りの中で示すことは、学習意欲の向上に効果的だったか。
- ② 教員からの発問や課題が、学習意欲の向上につながったか。



【国語】第3学年 日本語の調べ「初恋」

(2/3時間目)

- ① 目標を具体的にすることで、意欲的に学習に取り組むことができたか。
- ② グループ学習を通して、より語句に注目した読み取りができたか。
- ③ 振り返りをするすることで、今後の学習に役立てることができたか。



授業研究会では、KJ法にて、「授業の視点」を基に把握した児童生徒の変容などを中心に協議を行っている。小学校の教員が、積極的に発言している生徒の姿から、子どもの成長や小学校との学習内容とのつながりなどの意見を述べる場面も見られた。

また、「ねらいの提示」において、学習意欲を高める工夫について話し合ったり、「振り返る活動」において、児童生徒に分かったことやできたことなどを継続して書かせることの大切さなどを確認したりすることで、協議した内容をその後の日々の授業に直ぐに生かすようにしている。

小学校と中学校の教員が具体的な意見交換をすることにより、生徒理解が深まるとともに、授業者及び参観者の授業力の向上が図られている。

小・中学校を会場にして、小・中学校合同研究授業・授業研究会を実施することで、中学校の教員が、小学校の教員による児童一人一人に対するきめ細かな指導を目の当たりにしたり、小学校の教員が、系統性を重視し、専門性を生かした中学校の授業を参観したりし、お互いに学ぶことも多かったという感想も多く見られた。



年間6回の小・中学校合同研究授業・授業研究会を通して、「参観の視点」に基づいて話し合いをすることで、小・中学校が一体となって指導力の向上を図るとともに、児童生徒の思考力・判断力・表現力の育成を目指した学習指導の工夫・改善に向けて取り組んでいる。

(2) 教員の交流の良さ

中学校の教員が、小学校の5、6年生を中心に授業を行っている。算数では週5日、小学校担任と少人数指導を、外国語活動では週1回、また、音楽では週3日、T2として授業を行っている。

中学校の教員として、その専門性を十分に発揮し、小学校担任と連携することで、児童の主体的な学習の

促進や学習内容の確実な習得に大いに寄与するとともに、豊かな心の成長にもつながっている。さらに、中学校の教育内容を見据えて、小学校で身に付けるべきことを確実に身に付けさせている。

(3) 小・中学校9年間を見通した取組

学校課題を共有することで、小・中学校の全ての授業で、協働的な学習の場面を積極的に取り入れ、児童生徒が主体的に学習する態度を育て、「子どもの学び」を保障することができている。

小・中学校合同研修会では、児童生徒の発達の段階に応じた宿題の出し方や自主学習の在り方などについて検討した。小学校教員から、教科ごとの宿題は生徒の負担が増える可能性があるとの指摘があり、全校で宿題一覧表を作成し、内容を精選するなど工夫している。また、授業研究会の際に、振り返りや自己評価等についても、教科の特性や発達の段階を考慮することなどの共通理解を図っている。

さらに、交通安全教室、新体力テスト、グリーンボランティア活動、学習成果発表会などを合同で実施し、教員だけでなく児童生徒の心の交流も図っている。

3 小・中学校学力向上担当者の感想

[中学校担当者]

- ・様々な小・中学校合同の取組を通して、当初の大きな目的である「中1ギャップの解消」が図られた。

[小学校担当者]

- ・算数科、音楽科、外国語活動の小・中学校9年間を見通した系統的な学習内容を理解することで、指導に役立てることができた。

まとめ

- ◆ 小・中学校教員が一体となって授業研究会などを行うことや授業の視点、観察する班を明確にすることで、児童生徒に関する情報の共有や学習のつまずきの未然防止、授業中における変容のより正確な把握ができ、細かな支援や指導を行うことができます。
- ◆ 小中一貫教育の観点から、学校課題を共有して合同で授業研究会などを行うことで、小・中学校で指導内容や指導方法を連続させることができます。

II 実践事例

2 授業研究会

事例7 [小学校] 思考力・表現力等の向上を目指し、調査問題を活用した授業実践に取り組んだ事例

■取組のポイント

- 調査結果分析から授業改善の必要性を全教職員で共通理解し、算数科で調査問題を活用した授業実践を通して授業づくりに取り組んだ。
- 下位層の児童が活用の問題に粘り強く挑戦できるよう、管理職を含む全校体制で継続的、計画的に個別指導の徹底に努めた。

■学校の概要

旧来の農家と新興住宅、集合住宅が混在するとともに近年、大型店や飲食店が進出し、活気ある地域に位置する学校である。児童数655名、25学級（特別支援学級7学級を含む）の大規模校である。明るく素直で人懐こく、個性豊かな児童が多い。特別支援学級数が地区最多で、個に応じた指導の充実を図っている。

とちぎっ子学習状況調査結果では、4年生の算数、理科、5年生の国語、算数の活用問題、理科でやや県平均を下回るが、他は県平均と同程度であり、徐々に学力向上が図られている学校である。また、自尊意識や規範意識では、県平均を大きく上回っている。

■取組の内容

1 「活用の授業」を位置付ける取組

(1) 調査結果の分析と重点的な具体策の検討

とちぎっ子学習状況調査、全国学力・学習状況調査の結果を全教職員で分析し、成果と課題を明確にすることで、重点的具體策を検討した。

- ① 「書くこと」に課題があり、言語活動の充実を目指す。
- ② 基礎的・基本的な知識を活用する力（思考力・表現力等）の育成を目指す。
- ③ 下位層の児童の割合を減らすことを目指す。

(2) 分析結果に基づく「活用の授業」づくり

分析結果から思考力・表現力等の育成を最重点に取り組んだ。昨年度まで取り組んできた「学び合い」、「言語活動の充実」を継続しながら「学力向上」に重点を移し、授業づくりに努めた。

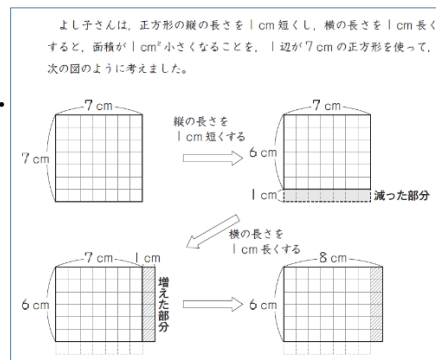
- ① 全国調査の活用の問題に触れさせるために、授業で問題に挑戦させる時間を設けた。
- ② ①の実践以降、「授業改善が不可欠である」という教員の考えを集約し、授業づくりを進めてきた。
- ③ 「活用の授業」を年間6回計画的に行い、授業改善に取り組んだ。

(3) 「活用の授業」6年生の例

回	6年
1	もとの洗剤の量は？(H27全学B問題)
2	賞品の分け方を考えよう。ゲーム賞品の分け方を説明する。
3	震災のデータから提案しよう。
4	問題を発展させよう。「面積の変わり方を見つけよう。」(H28全国B問題)
5	全体を求めて図や表にしながらいずれの考えを活用して問題を解決する。

(4) 「活用の授業」の実践例

※実際に活用した「平成28年度全国学力・学習状況調査算数B大問2」



6年3組 算数学習指導案	
1 題材名	面積の変わり方を見つけよう
2 目標	算数の問題場面で見いだした考えを活用して、条件を変更した場合について発展的に考察し、その理由を考える。(略)
5 展開	
学習活動	主な支援と留意点
1 本時の問題を把握し、解決する。 問題1 1辺の長さが7mの正方形の縦の長さを1m短くし、横の長さを1m長くすると面積は変わるか調べよう。 ○結果の見通しを持たせる。 ・同じ、小さくなる ・大きくなる ○各自で解決する。	● 土地を買うという場面を設定する。1辺が7mの正方形が縦-1m、横+1mの長方形に変わると面積が変わるかどうかが投げかけ、課題解決の必然性をもたせる。(略) ・自分の予想と結果を比べることで、本時の課題につなげる。
2 本時の学習課題を設定し、解決する。 ねらい 縦の長さ○m短くし、横の長さを○m長くした時、面積の変わり方を調べよう。	● 原題を変えて考えさせる。 1辺の長さ7mの正方形の縦横の長さを±a mにしたときの面積の変わり方を調べる。初めに±1mの時に1㎡減ったことから、結果の予想をさせる。
3 グループで面積の変わり方が、図ではどのようにになっているかを調べる。(略)	● 増減した数を2乗すると減る面積になることを確認し、学習活動1から、数値が図ではどのようにになっているか考えさせる。(略)
4 調べたことから、増減の数値と面積の変化(図)を対応して考える。(略)	● 1、4、9、16という数値は図の上では1辺が増減した分の長方形になることから、(短くした長さ)×(長くした長さ)という式と対応することをまとめる。(略)
5 正方形の1辺の長さを変えた場合の面積の変わり方を調べる。(略)	
6 本時の学習の振り返りをする。	● 問題を変えて、発展的に考えるおもしろさやよさを振り返らせる。(略)

「活用の授業」の学習指導案



グループで調べ、話し合った結果を発表する様子

(5) 実践から分かったこと

- ① 活用問題を授業で解かせることで、教師は、今までの指導では、新しい時代に必要とされる資質・能力の育成は難しいという認識が変わり、授業改善の取組として、活用の問題を授業に位置付けることにつながった。
- ② 授業実践に当たって、市教育委員会の「授業力向上事業モデル校」となり、市からの支援を受けた。外部大学講師を交えて、指導案検討から全教員で取り組めたことで、授業づくりの意識が変わった。

2 下位層の児童への支援

(1) 個別の指導・支援

下位層の児童は、通常の授業の中だけでは、基礎・基本の定着、思考力・表現力を育てるには困難なことが多い。そのため、ティームティーチングや習熟度別学習を取り入れて対応しているが、さらに、個別指導の徹底を図り、粘り強く問題に挑戦できるよう、朝の学習の時間に全校体制（管理職、事務職員、養護教諭、専科教員、非常勤講師、学習ボランティア等を加えて）で、個別指導が必要な児童を対象に、取り出し指導を継続的に行っている。なお、対象児童については、担任等が保護者の了解を得た上で行っている。

(2) 取り出し指導の内容

- ① 朝MIMの実施により、語彙力の向上を図っている。1学期は2、3年生49名を対象に、2学期は1、2年生49名を対象に、毎週月曜日に実施してきた。2名1組にして、MIM教材をゲーム的に取り上げて学んでいる。
- ② 朝算数の実施により、基礎・基本の定着を図っている。3、4年生42名を対象に、計算領域の個別指導や学習内容の補充を毎週火曜日に行っている。また、4～6年生36名を対象に、学習内容の補充を毎週木曜日に行っている。

3 取組の成果

(1) 全国学力・学習状況調査問題の実施

下位層の児童に対する全校体制できめ細かく徹底した個別指導の継続により、基礎的・基本的な知識及び技能がより確実に定着したことで、活用の問題に粘り強く挑戦する児童が増えた。学校独自に、全国学力・学習状況調査問題（平成25年度版）を実施し、4月実施の調査結果と比較したところ、無解答の児童が減少し、正答数の増えた児童が増加した。

(2) 「児童の変容」教員意識調査結果

実践後の教員の評価から、教員自身が以下のような成果を実感している。

① 思考に関すること

- ・図や表、文から読み取れることを話し合いながら難しい問題にも取り組めるようになった。
- ・公式や解き方を覚えるだけでなく、その理由を考えたり、考えを書けたりするようになった。
- ・問題を読み、見通しと説明を考えて書くようになった。

② 表現に関すること

- ・正解を求めるだけでなく、友達に分かりやすく説明することや、簡単に解決できる方法を説明しようという意欲が向上してきた。
- ・根拠をはっきりさせて説明しようとする姿が見られるようになった。
- ・伝えるために、わかりやすくキーワードを捉えて言葉に表そうと努めている。

③ 意欲に関すること

- ・個人差は見られるものの、自主学習に取り組める児童が増えてきた。
- ・児童が、算数の授業で考えることの楽しさを感じている。
- ・難しい問題に諦めず取り組むようになった。

まとめ

- ◆ 調査問題を活用した授業づくりに全校体制で取り組むことで、教員の意識が変わり、授業改善（思考力・判断力・表現力等の育成）につながります。
- ◆ 調査問題を活用した授業づくりを進めることで、活用問題や難しい問題に諦めず、粘り強く挑戦する児童が増えていきます。
- ◆ 下位層の児童に対する全校体制で継続的な個別の指導・支援により、基礎的・基本的な知識及び技能の定着が図られ、学び合いの授業に意欲的に参加できるようになります。

II 実践事例

2 授業研究会

事例8 [小学校] 子どもの主体的な学びを育てる授業改善を図るために、学校全体で学習サイクルの確立と充実に取り組んだ事例

■取組のポイント

- 授業スタンダード（校内共通の授業モデル）としての「みんなの学び」を奨励した。
- 「みんなの学び」を確立するために、校内研修において一人一授業を実践した。
- 「みんなの学び」の充実を図る継続的な授業実践を行った。

■学校の概要

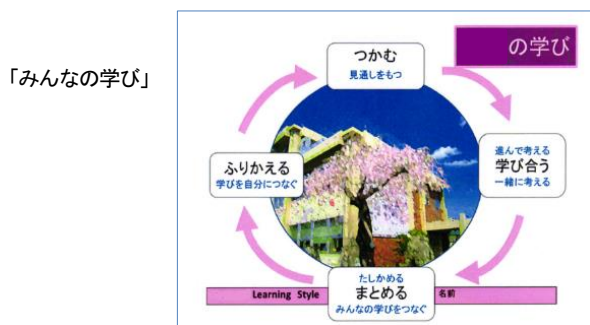
市の中心部に位置し、児童数363名、学級数17学級（特別支援学級を含む）の中規模校である。地域人材をはじめ、周辺施設の美術館・博物館等との連携による地域教育力を生かした教育を推進している。平成26年度学力向上アドバイザー派遣指定校であり、派遣以降のとちぎっ子学習状況調査や全国学力・学習状況調査等の結果では、徐々に学力向上の取組の成果がうかがえる。

■取組の内容

1 授業スタンダードとしての「みんなの学び」の奨励

(1) 「みんなの学び」の提案

平成26年度に、校長が本校の児童一人一人の学力向上を願い、授業改善を図るために「みんなの学び」を提案した。これは、秋田県の探究型授業を参考にした子どもの主体的な学びを育てる学習モデルである。一つの学習モデルを提示し、教職員の共通理解を図ることにより、本校の授業スタンダード（校内共通の授業モデル）を確立しようとしたものである。このことにより、学力向上を図るための授業づくりに向けた組織的な取組が進められている。併せて、児童自身が授業の進め方を理解することで、どの先生の授業でも同じように落ち着いて、安心して受けられることにつながっている。



① つかむ	学習問題や問題場面から本時の学習課題（めあて）を把握し、課題解決の見通しを持つ。
② 学び合う	課題について自分で考えたり、ペアやグループで考えたり、クラス全体で学び合ったりする。
③ まとめる	学習課題に対する学びのまとめをする。さらには類題を解くなどして、学んだことを確かめる。
④ ふりかえる	児童一人一人が、自分の学びを振り返り、メタ認知する。

(2) 教職員、児童、保護者への働きかけ

校長は、教職員、児童、保護者に対して、次のような働きかけを行い、「みんなの学び」を提案した。

① 教職員

「みんなの学び」を考案し、分かりやすく示した図を用いて、校内研修で教職員へ説明した。

② 児童

「みんなの学び」の図を印刷した学習ファイルを作成し、全校児童に配布するとともに、各教室に掲示した。また、校長が全校集会で全児童に説明するとともに、担任等が授業の中で丁寧に説明した。

③ 保護者

年度当初の授業参観日に、保護者に対して学校経営について説明する際、主体的に学ぶ子どもを育成する「みんなの学び」を実現することで、学力向上に取り組むことを強調した。

2 校内授業研究会と一人一授業の実践による校内研修

(1) 校内授業研究会の実施

① 年3回の校内授業研究会の実施（平成28年度）

県教委・市教委の指導主事や大学教授を指導者として派遣要請し、校内代表の授業者による研究授業及び授業研究会を実施した。



② 「みんなの学び」の充実を図るための授業を見るポイント

ア ねらい	児童が本時のねらいをよく理解し、見通しを持つことができているか。
イ 学び合い	児童が友達と互いの考えをよく聴き合い、伝え合う「学び合い」ができているか。
ウ 振り返り	児童が学んだことをことばや文章で表現するなどして、振り返りができているか。

※ 「みんなの学び」の共通理解に基づき、授業研究をすることにより、授業を見る視点が明確になり、授業研究の質的な向上が期待できる。

- (2) 校内授業研究会と一人一授業の授業実践をつなぐ
- 校内授業研究会の実施後に、校内研修における「振り返り」をまとめて、全教職員で共有を図る。

校内授業研究会後の教師の「振り返り」より
<ul style="list-style-type: none"> 子どもの様子にスポットを当てた授業研究が勉強になった。子どもの反応を意識したい。 授業を通して話し合ったことやご指導いただいたことを次につなげたい。 活発なグループ活動のための手立てがわかった。

- (3) 一人一授業の実践
- 校内授業研究会で各教員が学んだことを、一人一授業に生かして実践し、実施後の「振り返り」を全教職員で共有を図る。

① 指導案	A4版1枚で作成し、単元名、本時の目標、授業を見る視点、展開、評価の観点を示す。
② 参観者	低中高ブロックに別れて、所属するブロックの授業者の授業を参観する。
③ 研究協議	付箋を利用して、やりとりをする。

3 「みんなの学び」を充実させる継続的な実践

(1) 平成26年度（1年次）

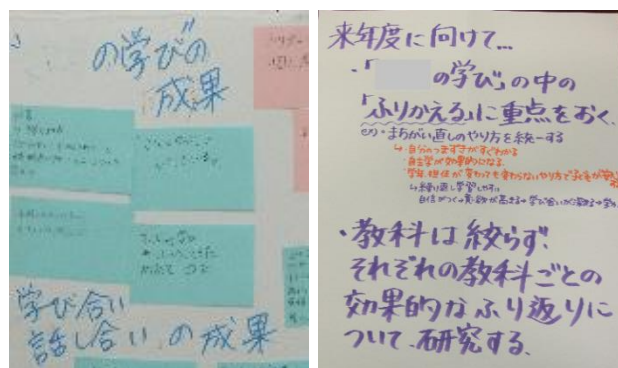
- ① 授業充実の重点
- ア 「ねらい」、「学び合い」、「振り返り」の学習過程の提案
- イ ペア・グループによる学び合い活動の積極的な導入

(2) 平成27年度（2年次）

- ① 授業充実の重点
- ア 「（めあてを）つかむ」において、児童が自ら課題意識と見通しをもって解決できるようにする。
- イ 考えをまとめ、表現する言語活動を充実する。（なぜそうなるのかなど、理由を考え、表現していく学習活動を意図的に増やす。）
- ② 年度初めに、校内研修で「みんなの学び」の参考となる他県の算数の授業ビデオを視聴する。

③ 年度末に、課題を焦点化するための校内研修を実施する。

- ア 年度末に校内研修で各教師が授業実践を振り返り、学力向上に向かう、子どもの主体的な学びを育成する「みんなの学び」の充実が図られたか、その取組の成果と課題について、KJ法を用いて集約する。
- イ 次年度の「みんなの学び」充実の方向性を検討し、課題及び努力点を焦点化・重点化する。



KJ法による成果と課題の焦点化・重点化

(3) 平成28年度（3年次）

- ① 授業充実の重点
- ア 児童の学習意欲を高めるために、次時につながるような「振り返り」の書き方を工夫するなど、「めあて」に対応した振り返り活動を充実させる。

<p>ふりかえり</p> <p>「めあて」についてわかったこと 前の学習とにているところ くふうして考えたこと 友だちの考えでよかったところ もっとやってみたいこと まだよくわからないこと</p>
--

高学年の振り返りのポイント

- イ 学び合いを深めるための「話す・聞く」指導の充実
- ② 小中連携を図り、中学校区内の小・中学校において、「みんなの学び」を共通理解し、協同して授業づくりを進めている。

まとめ

- ◆ 校内授業研究会から一人一授業につながる授業研究を実践することで、学校全体として学力向上に向けた、各教員の授業改善の取組となり、全校体制で子どもの主体的な学びを育てる授業スタンダードを確立することができます。
- ◆ 「みんなの学び」を充実させるために、課題を焦点化して、継続して授業実践に取り組むことは、有効であり、かつ肝要なことです。

II 実践事例

2 授業研究会

事例9 板書計画に基づく授業改善例

■取組のポイント

- 校内で形式を統一した板書計画を作成し、授業改善に努めた。
- 教師間で板書計画を研究し合い、板書ライブラリーに保存し、共有化を図った。
- 板書と連動したノートづくりにより、児童が家庭での自主学習で復習に取り組めるように支援した。

■学校の概要

本校開学の歴史は古く、本校を核に多くの分校を擁し地域の教育の中心であった。

学校は、農村地帯に位置し、代を重ねる農家も多い。地域住民は、教育に対する関心が高く、教育活動に協力的で、物心両面に渡って学校を支えている。保護者は、学校行事やPTA活動などに意欲的に参加している。

全学年が、単学級の小規模校である。児童の家庭は、3世代同居が多く、落ち着いた家庭環境の中で生活している。また、望ましい生活習慣が定着しており、学習意欲も高い。

教師間の人間関係が良く、協働性もあり、それらが各種の調査結果から得られた学習指導上の課題の改善に効果を発揮している。

とちぎっ子学習状況調査の結果は、全教科で県平均正答率を上回り、特に5年生の国語・算数では高い成績を示している。

■取組の内容

1 板書計画と授業改善

授業の目標を達成するには、授業の「めあて(ねらい)」の設定や「学習活動」、「振り返り」を工夫することが大切である。これを、1単位時間の中で構造的に表したものが、板書計画である。

児童にとって、板書は、ノートを取る際の一番の手本となるとともに、授業の流れを振り返るのにも重要である。そのために、教師は、板書計画を立てて、工夫された板書、分かりやすい板書を心がける必要がある。

本校では、形式を統一した板書計画を作成し、授業で実践しているが、以下のように授業改善にも効果的に結び付いている。

[教師の感想から]

- ・板書計画を作成することで、教材研究の時間が増え、それが授業力の向上にもつながっていた。
- ・1単位時間の授業の流れを意識し、時間の使い方を考えた指導を心がけるようになってきた。
- ・課題の設定や発問の仕方を工夫したり、資料などを積極的に活用したりするようになった。

- ・児童は、板書を写すだけではなく、自分の考え等を付け加えながら記述することができるようになってきた。

2 板書作成のポイント

本校では、板書を作成する際のポイントとして、以下の7項目を示し、共通理解を図っている。

板書を作成する際のポイント

- ① 学習のねらい(めあて)を示す。
- ② ねらい(めあて)に整合したまとめにする。
- ③ 児童の思考に沿った構造的な板書を行う。
- ④ 振り返り活動で活用しやすい板書にする。
- ⑤ 板書の文字が児童の手本となるようにする。
- ⑥ 板書する際に、チョークの色分けを行う。
- ⑦ 黒板をいつもきれいにし、授業の内容に関係がないプリント類など、不要なものは貼らない。



1年 国語の板書例

3 板書の保存と共有化

本校では、毎月の職員会議において、板書作成の留意点について確認している。また、授業終了時に板書を撮影してタブレットに保存し、「板書ライブラリー」を作成することで、いつでも活用できるように共有化を図っている。全ての授業の板書内容を保存することはできないことから、国語、算数、道徳について、毎時間保存するようにしている。

さらに、保存した板書画像をプリントアウトして週案に添付し、管理職が授業実践の状況を確認している。

4 板書と連動したノートづくり

ノートは、児童が自分の思考を表現する場であり、思考や学習内容を整理する場でもある。また、ノート指導は、言語活動の「書く」ことに関わる大切な活動でもある。

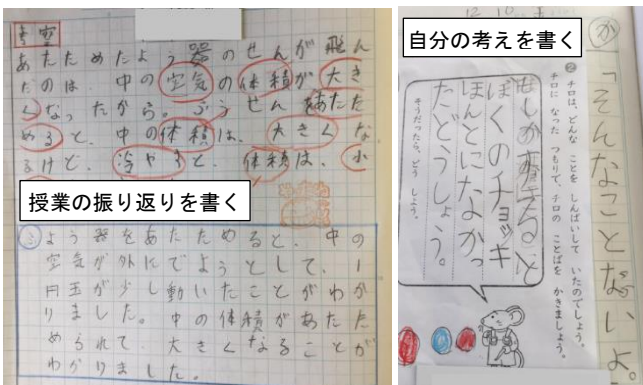
ノート指導においては、板書を手本にしながらかせることが考えられるが、教師の板書を基に、それぞれの児童が自分自身で工夫して書けるようにしていく必要がある。教科ごとの基本的なノートの取り方はもちろん、授業のまとめ方や感想の書き方などについても、学校全体での共通理解の下に統一した指導を行っていくことが大切である。

また、授業後に回収したノートに、助言や励ましの言葉、感想などを記入したり、工夫して書いている児童のノートを紹介したりするなど、評価に生かすことにより、児童の意欲を高めている。

本校では、ノートを取る際の約束として、以下の7点について、児童に統一して伝えている。

ノートを取る際の約束

- ① 日付、ページを書く。
- ② 線を引くときは定規を使う。
- ③ めあては⊗を使う。
(めあてを赤囲みする)
- ④ 自分の考えを書くときは⊙を使う。
- ⑤ 振り返りを書くときは⊚を使う。
(振り返りを青囲みする)
- ⑥ 行を変えて書く。
- ⑦ 印をつけて揃えて書く。



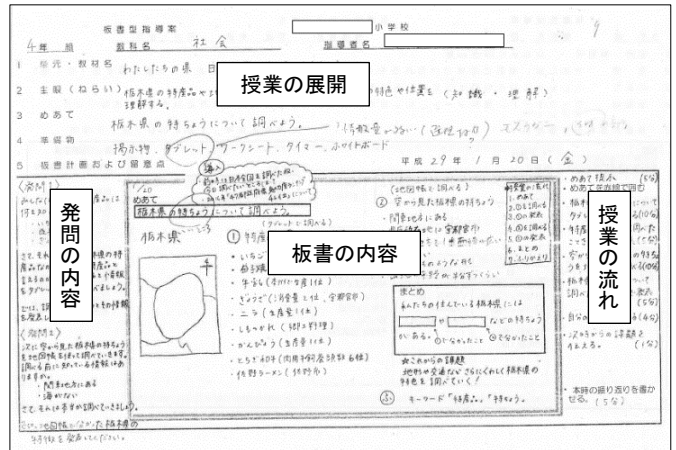
4年 理科のノート例

1年 国語のノート例

さらに、ノートを取ることの必要性や有効性を児童に感じさせるためには、板書とノートを連動させることを重視しながら板書計画を作成していくことが大切になってくる。そのために、児童と同じように板書計画作成用のノートなどの資料を準備している。板書の

内容とともに児童に書かせる分量を考慮した「板書用ノート・ワークシート」を作成することも効果的である。

「板書用ノート・ワークシート」を作成することそのものが授業の教材研究を促進するとともに、授業の充実にもつながっていく。以上のことから、本校では、これを「板書型指導案」と呼んでいる。



板書用ノート・ワークシート（板書型指導案）の例

まとめ

- ◆ 本校では、授業改善を進めるに当たり、「板書の構造化」を取り上げました。授業の板書計画の作成や、板書と「児童のノートづくり」との連動を意識した授業の実践などの取組を、全校体制で進めています。
- ◆ 授業改善への意識を高めるために、教員一人一人の素晴らしい取組の共有化を図っています。また、毎月の職員会議で、板書計画の作成に関する意見交換や板書作成に統一性をもたせるための確認を行っています。
- ◆ 各担任が、板書をタブレットにデータで保存し、板書ライブラリーとして共有化を図るとともに、いつでも取り出して活用できるようにしています。
- ◆ ノートづくりは、授業と家庭学習をつなぐ役割を果たし、授業の復習をはじめ、自主学習を促すことにも結び付いています。

これにより、「板書計画 → 授業〔めあて・振り返り〕 → 家庭学習・自主学習〔めあて・振り返り〕の流れ（サイクル）」が定着しつつあります。

II 実践事例

3 学業指導の充実

事例10 [小学校] 学業指導の充実を通じた学力向上の取組の事例

■取組のポイント

- 学びに向かう集団づくりのため、日々の授業で聴き合う関係を育成するとともに、朝の読書活動やソーシャルスキルの育成に全学年で取り組んだ。
- 子どもが意欲的に取り組む授業をつくるため、「魅力ある課題」→「個人で学習する場面」→「集団で学習する場面」→「授業を振り返る場面」の流れを意識した授業を全クラスで実践した。

■学校の概要

学区の中央部を県道とバイパスが東西に走り、南北に広域農道が開通して交通量も多い地域に立地する中規模校である。

「まごころ教育」を学校経営の中核に据え、児童は明るく穏やかで欠席が少ない。読書が好きで、学校でも家庭でもよく読書をしている。

とちぎっ子学習状況調査や全国学力・学習状況調査の教科における結果は、いずれも県や国の平均正答率を上回っている。

■取組の内容

1 とちぎっ子学習状況調査の質問紙調査の結果から

学業指導における「帰属意識」に関連する調査項目の「自分はクラスの人の役に立っている」について、「はい」と回答した割合を、同一集団に着目して本校と県の結果と比較すると、平成26年度4年生は、平成27年度5年生のとき12ポイント上昇している。同様に、平成27年度4年生は、平成28年度5年生のとき21.1ポイント上昇している。

「規範意識」や「互いに高め合える学級」の項目でも県平均を大きく上回っていることが調査結果から明らかになった。また、児童の欠席が少なく、全ての教科で県や国の平均正答率を上回っていることから、集団づくりと授業づくりへの組織的・継続的な取組が効果を上げていると考えられる。

2 学びに向かう集団（学級）づくり

(1) 聴くことを充実させる取組

授業では、どのクラスもペア学習やグループ活動を取り入れ、聴き合う関係の育成を図っている。子ども同士で「どうしてそうなるの？」と訊ける関係を築くことで、分からない子も意欲的に授業に参加できるようにしている。

(2) 朝の読書活動

朝の読書は、週4回（月・火・木・金の10分間）行っている。読む本は児童が選んだものを使用している。また、各学年で、教師が選んだ本を10冊程度「必読図書」に指定し、読書後に150字程度の感想文を書かせている。「必読図書」を全部読み終えた児童には、校長から直接「読破賞」が贈られる。ほとんどの児童は、2学期に「読破賞」を貰っている。朝の読書の習慣化によって、落ち着いて授業に参加できると考えられる。

(3) ソーシャルスキルを身に付ける取組

全学年一斉で、毎月1回、水曜日の業間の25分を利用して、年間10回のソーシャルスキルの指導を学級担任が行っている。本校は、1・3・5年生になるときに、クラス替えを行っているが、その際、集団に馴染めず仲間に入って行けない児童が見られる。ソーシャルスキルの活動を通し、一緒に身体を動かしたり、ゲームをする中で友達のよさを理解し、自分の存在感も感じたりすることができるので、この活動は学級づくりに効果的であると考えられる。



3 子どもが意欲的に取り組む授業づくり

(1) 授業展開の工夫

自信をもたせる授業を展開するため、全クラス共通で、「魅力ある課題の設定」→「個人で学習する場面の設定」→「集団で学習する場面の設定」→「授業を振り返る場面の設定」の4つの場面を設定している。特に、「集団で学習する場面」では、児童一人一人が活躍できる場を意図的に設定し、ペア・グループ・クラス全体で聴き合うことを通して、今まで気付かなかったことや仲間のよさを見つけたり、複数の考え方から新しい事柄をつくり上げたりするなど、学び合う喜びを味わえるようにしている。

(2) 算数学習の進め方

平成24年度、算数科を中心とした学校課題に取り組んだ際、学習過程を考える必要性から、教員が意見を出し合い、「算数学習の進め方」を作成した。算数科以外の教科でも、「つかむ」「見通しをもつ」「話し合う」の3つの学習過程を取り入れ、日々の授業で実践している。

学習過程	学習活動	算数の授業で大切にすること
つかむ	1 本時のめあてを確かめる。 ふくろの中のものをも 正しく数えるほうほうを考えよう。 ○おはじき ○つみ木 ○エコキャップ ○ストロー ○折り紙 ○カラークリップ	○問題提示の仕方を工夫する。 ・問題のストーリー性を考える。 ・具体物や絵、図などを活用する。 ・問題を式に表す。 ・問題の疑似体験をする。
見通しをもつ	2 グループごとに正確に数えるための方法を考える。 ・一つずつ数えよう。 ・2つずつ(5つずつ)数えよう。 ・10ずつまとめよう。 ・輪ゴムでまとめよう。 ・袋に入れよう。 ・ケースに入れていこう。	○今までに学習したことで使えるものはないかな？ ・ノートを見て考える。 ・先生のアドバイスやヒントカードをもとに考える。 ・前時までの学習で使った指示物や友達考えなどを参考にする。
解決する	3 袋の中のものをも、グループで協力して数える。 ・2こずつ、5こずつなどの数え方を使ったり、印をつけたりして数える。 ・10ずつ輪ゴムで束にする。	○具体物や半具体物、絵、図、数直線などを使う。 ○あとで見てわかるように、友達が見てもわかるように言葉や印などで書く。 ○先生からのヒントカードやワークシートを使う。 ○一人で考えたり、友達と一緒に考えたりする。
話し合う	4 グループごとに数えたものと数え方を発表する。 ・10のまとまりを作ったら、100が2つ、10が4つと5ができた。 ・1つずつ数えるより、まとめて数えた方が間違わないし、速い。 ・どの数え方でも、答えは同じだね。 ・245こになった。	○グループやみんなの前で自分の考えを発表する。 ○問題を解くときに使った具体物や半具体物、絵、図、数直線などで説明する。 ○自分の考えを友達の考えと比べる。 ・同じところはどこかな？ ・違うところはどこかな？ ・どの方法がいいかな？ かんたんな方法 べんりな方法 算数はかせ(速く、簡単に、正確に)
まとめ	5 学習のまとめをする。 ・学び合いを通して、考えを明らかにしたり、深めたりする。	○本時の目標に迫る「学び合い」となるよう、発言や考えを整理する。
考えを使う	6 袋の中のビーズを数えよう。	○どんなときもこの考えがつかえるかな？ ・練習問題を解く。 ・自分で問題を作ろう。
振り返り	7 本時の学習を振り返る。 ・学習した内容をノートにまとめ、理解する	○児童の考えを生かし、本時の目標に沿って学習内容をまとめる。

「算数学習の進め方」

(3) コミュニケーション能力を育む授業

話す・聞く際の視点を教室に掲示し、それらを活用して児童自身の振り返りを行い、話し方や聞き方の技能を身に付けさせる。また、全教科・領域等において、意図的・計画的に体験活動を取り入れた学習を展開し、「よく聞き、考えを伝え合う」活動を意識的に行う。

(4) 授業研究会の工夫

教員の授業力の更なる向上のため、今年度から授業研究会におけるグループ協議の人数を3人とした。昨年度までは、2グループで協議していたが、教員から出された意見を基に、小集団での協議に変更した。1回の研究授業では、2名が授業を行う。そして、授業研究会では4つのグループを作り、1授業を2グループで協議し、最後に全体会で報告する方法をとっている。

教員からは「授業を見る観点を決め、3人で協議することで、以前より話し合いが深まったと感じている。」などの感想が出されている。



授業研究会の様子

まとめ

- ◆ 聴き合う関係の育成や朝の読書は、児童が安心して、落ち着いた気分で授業に取り組めるようになる効果があると考えられます。
- ◆ ソーシャルスキルを身に付ける活動を、計画的・組織的に行うことで、児童相互・児童と教員相互の信頼関係を醸成し、様々な不安やトラブルを解決することに役立つと考えられます。
- ◆ 全教員の共通理解のもと、児童生徒一人一人が活躍できる授業場面を設定したり、互いの意見をよく聞き、考えを伝え合ったりすることが、学力向上にも有効であると考えられます。

Ⅲ 資料

次の①～④の資料について説明します。

① とちぎの子どもの「確かな学力」向上のために

言語活動の充実を図るための3つの提案

本資料は、「全国学力・学習状況調査」及び「とちぎっ子学習状況調査」の結果から明らかになった課題を踏まえ、言語活動の充実を図るための具体的な取組を提案しています。これまでに配布されている資料「授業改善に向けた3つの視点」と併せて活用ください。

② 学力向上アドバイザーからのメッセージ

本資料は、学力向上アドバイザーが学校を訪問した際に活用した資料の一例です。学力向上アドバイザーの2700回程度の学校訪問を踏まえ、組織的に学力向上に取り組み、成果を上げている学校の共通点を、学力向上の3つの柱に基づいて、7つにまとめています。学力向上の取組の参考にすることができます。

③ とちぎの子どもの「確かな学力」向上のために

平成28年度全国学力・学習状況調査結果から

本資料は、平成28年度全国学力・学習状況調査の結果について、栃木県（公立）と全国（公立）との比較から分かる特徴をまとめたもので、全24ページで構成されています。県教育委員会ホームページからダウンロードし、活用ください。

<http://www.pref.tochigi.lg.jp/m04/tochigikko.html>

④ ③の資料を活用した校内研修例

本資料は、③の資料と併せて配布された資料です。自校の調査結果を授業改善につなげるための校内研修の進め方を例示しています。③の資料を活用する際の参考にしてください。

とちぎの子どもの「確かな学力」向上のために 言語活動の充実を図る3つの提案

平成28年12月 栃木県教育委員会

本資料では、「全国学力・学習状況調査」及び「とちぎっ子学習状況調査」の結果から明らかになった課題を踏まえ、言語活動を充実させるための3つの提案をします。「とちぎの子どもの『確かな学力』向上のために 授業改善に向けた3つの視点」(栃木県教育委員会 H27年度)と併せて御活用ください。

各教科の調査結果から明らかになった課題 (抜粋)

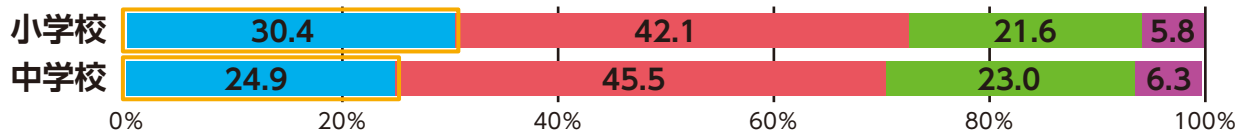
- ◆ 基礎的・基本的な知識及び技能に関する問題は概ね良好な結果であったが、いくつかの問題において課題が見られる。
- ◆ 思考力・判断力・表現力等を問う問題については、依然として課題が見られる。特に、資料や情報に基づいて自分の考えを明確に記述したり、筋道を立てて表現したりするなどの記述式問題の平均正答率が低い。

児童生徒質問紙調査結果から明らかになった課題 (抜粋)

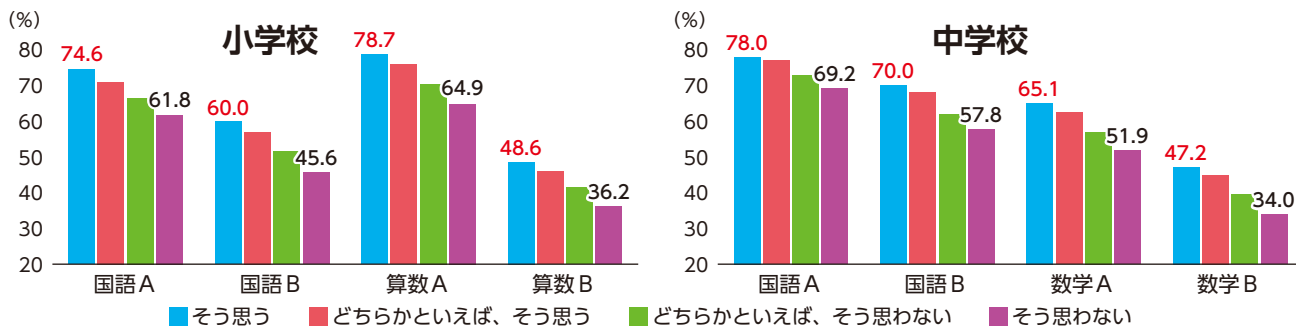
- ◆ 話し合い活動を授業などでよく行っているが、話し合いに深まりを感じている児童生徒が少ない。

「学級の友達と[生徒]の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」

※平成28年度全国学力・学習状況調査(栃木県) 児童生徒質問紙



「そう思う」と回答した児童生徒の割合は、3割程度であることが分かります。



「そう思う」と回答した児童生徒の方が、平均正答率が高いことが分かります。

言語活動の充実を図る3つの提案

提案 1

言語活動を行う**目的**を確認しましょう

提案 2

言語活動を**計画的**に位置付けましょう

提案 3

自分の考えを**書く活動**と、言葉で人に伝える「**説明**」「**話し合い**」などの**活動**を相互に関連付けましょう

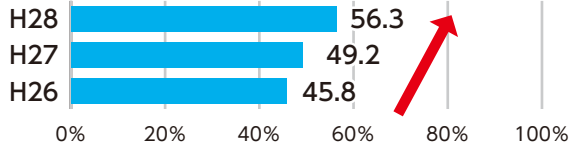
提案1 言語活動を行う目的を確認しましょう

「児童生徒に対して、学級やグループで話し合う活動を授業などで行いましたか」

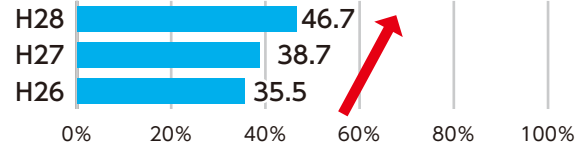
※全国学力・学習状況調査（栃木県） 学校質問紙

※ 「よく行った」と回答した学校の割合

小学校（栃木県）



中学校（栃木県）



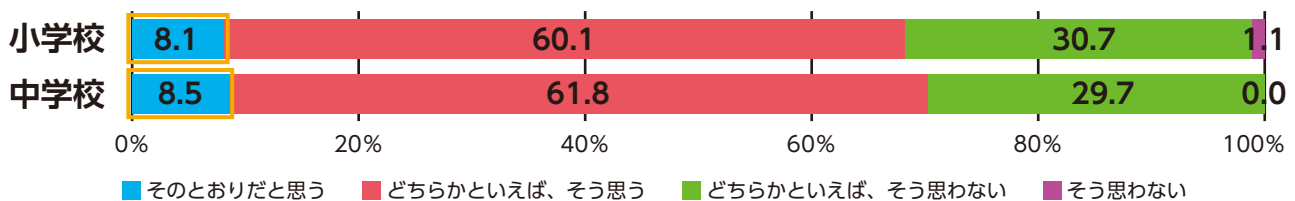
上のグラフを見ると、「よく行った」と回答した学校の割合が、年々増えていることが分かります。

そうですね。平成28年度は、約半数の学校で、学級やグループで話し合う活動を「よく行った」と回答しています。では、次のグラフを見てみましょう。



「児童生徒は、学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」

※平成28年度全国学力・学習状況調査（栃木県） 学校質問紙



「そのとおりだと思う」と回答した学校の割合は、小学校、中学校ともに1割以下であることが分かります。話し合いなどの活動で、「自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」と捉えている学校が少ないようです。

私は、子どもたちが楽しそうに話し合いを行っていただければいいと思っていて、考えの深まりまでは意識していませんでした。

なるほど。話し合いの場は多く設定されていても、単なる意見交換にとどまり形骸化していたり、話し合わせることで自身が目的になっていたりすることがありますね。

話し合いなどの言語活動をどのように捉えて、授業に取り組んでいったらよいのでしょうか。

話し合いなどの言語活動は、各教科等の目標を実現するための手立ての一つです。言語活動を通してどんな力を育成するかを明確にするとともに、授業の中で、言語活動を効果的に位置付けていくことが大切です。



言語活動の充実に関するQ & A

Q1

言語活動には、どのようなものがあるのでしょうか。



A1

平成20年中央教育審議会答申では、思考力・判断力・表現力等を育むために各教科で必要な学習活動の例として、次の6点が示されています。

- ・ 体験から感じ取ったことを表現する活動
- ・ 事実を正確に理解し伝達する活動
- ・ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする活動
- ・ 情報を分析・評価し、論述する活動
- ・ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する活動
- ・ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる活動 等

Q2

言語活動を充実させると、時間が足りなくなってしまうのでしょうか。



A2

1単位時間の中で、全ての場面において言語活動を充実させようとする、時間が足りなくなることがあります。各教科等のねらいを達成させるための手立てとして、どの場面でどのような学習活動を行うとより効果的かを考えて、言語活動を位置付けることが大切です。

Q3

言語活動を充実させると、基礎的・基本的な知識・技能の習得などがおろそかになってしまうのでしょうか。



A3

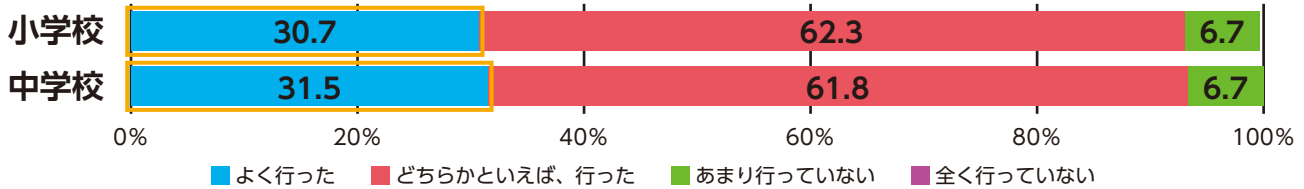
言語活動を充実させることは、基礎的・基本的な知識・技能をより確実に習得させることにつながります。

例えば、理科の授業において、児童生徒が、観察実験の結果から分かることをまとめる際、これまでに学習した科学的な言葉や概念を用いて表現したり、話し合ったりすることで、自分の考えを深めるとともに、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図ることができるのではないのでしょうか。

提案2 言語活動を計画的に位置付けましょう

「各教科等の指導のねらいを明確にした上で、言語活動を適切に位置付けましたか」

※平成28年度全国学力・学習状況調査（栃木県） 学校質問紙



「言語活動を適切に位置付けたか」という問いに対して、「よく行った」と回答している学校の割合は3割程度ですね。

そうですね。話し合いによる意見の交流の場面を設定するなど、言語活動を意識した授業は、よく行われているようです。でも、「言語活動を適切に位置付けている」という学校は、まだ少ないようです。



「言語活動を適切に位置付ける」とは、どういうことですか。

ここでの「適切に」とは、例えば、「計画的に」ということが考えられます。指導計画の中に言語活動を位置付ける際は、各教科等の指導のねらいのもとに、どのような力を身に付けさせたいのか、そのためにどのような言語活動を行うとより効果的なのかを考えることが大切です。



分かりました。実際に、言語活動をどのように指導計画に位置付けたらよいか、教えていただけますか。

では、「小学校4年 算数 折れ線グラフ」の単元の指導計画を例に、一緒に考えてみましょう。



ステップ1

単元の目標



まず最初に、**単元の目標**をしっかりと確認しましょう。

- 折れ線グラフのよさに気付き、進んで生活や学習に活用しようとする。【算数への関心・意欲・態度】
- 折れ線グラフから変化の様子を読み取り、資料の特徴や傾向を考えることができる。
【数学的な考え方】
- 資料を折れ線グラフに表したり、資料から変化の特徴を読み取ったりすることができる。
【数量や図形についての技能】
- 折れ線グラフで表すことが有効な場面を知り、その読み方や表し方を理解することができる。
【数量や図形についての知識・理解】

ステップ2



次に、単元全体を見通して、単元の目標を達成するために、**どこで、どのような言語活動を位置付けていくと効果的か**を考えます。

第7時に、「折れ線グラフを的確に読みとること」をねらいとした授業を行います。そこでは、単元全体を通して身に付けた力を使って問題解決ができるようにさせたいと思います。



単元の指導計画の中に、**言語活動を計画的に位置付けていくこと**が大切です。その際に留意する点は、次のようになります。

第1～3時は、単元のもととなる学習なので、グラフの読み方やかき方をしっかりと身に付けさせましょう。



第5・6時は、状況に応じたグラフの適切な読み方やかき方を学習します。「説明」「話し合い」などの活動を通して、意見の交流を行うとよいですね。



4年算数「折れ線グラフ」 単元指導計画

時数	本時のねらい
第1時 第2時	折れ線グラフの読み方を理解する。
第3時	折れ線グラフのかき方を理解する。
第4時	2つの折れ線グラフを同じグラフ用紙に表して考察し、読み取ることができる。
第5時	適切な目盛りの取り方や省略の仕方を考えたり、折れ線グラフと場面とを結び付けて読み取ったりすることができる。
第6時	折れ線グラフから読み取れることと読み取れないことを考え、折れ線グラフについての理解を深める。
第7時	折れ線グラフを的確に読み取ることができる。
第8時	基本的な学習内容の理解を確認し、定着を図る。

第4時は、前時までに学習したことをもとに考察する学習です。考察させる場面では、自分の考えを書く時間を十分に確保しましょう。



第7時は、身に付けた力を使って、グラフを読んだり、かいたりする学習です。自分の考えを書く活動と話し合い活動を相互に関連付けましょう。



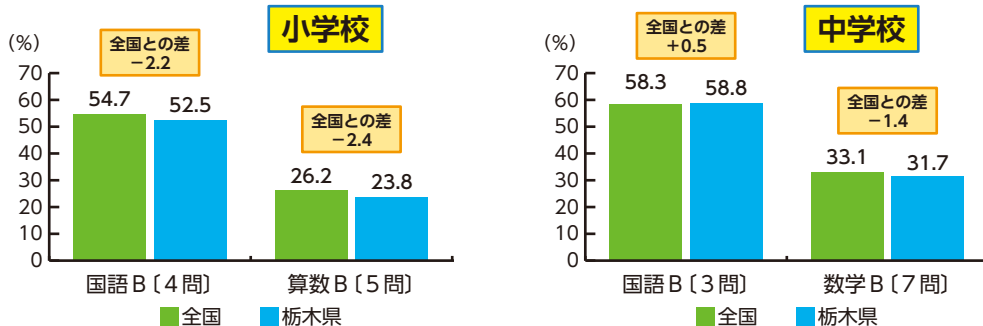
※ この表は、単元指導計画の一部を示しています。

提案3

自分の考えを**書く活動**と、言葉で人に伝える「**説明**」「**話し合い**」などの活動を相互に関連付けましょう

記述式設問の平均正答率

※ H28全国学力・学習状況調査結果（栃木県）
横軸：問題〔設問数〕



記述式設問において、平均正答率を全国の数値と比べると、中学校国語B以外の教科は、全国を下回っていることがわかります。自分の考えを文章で書くことに関して、引き続き課題があると考えられますね。

そうですね。思考力・判断力・表現力等を育成するために、授業において自分の考えを書く活動を意図的に位置付けることが大切です。また、書く活動と「説明」「話し合い」などの活動を関連付けることによって、自分の考えをまとめ、整理させることも大切です。



before

(例) 書く活動と話し合い活動を関連付けていない様子

それでは、〇〇について友達と話し合ってみましょう。



急に話し合うように言われても、考えがまとまらないな。話し合いをしても、意見を発表することができないかもしれない。



after

(例) 書く活動と話し合い活動を関連付けている様子

書く活動

それでは、〇〇について、気付いたことや考えたことをノートに書いてみましょう。その後で、書いたことをもとに話し合います。



よし、気付いたことをノートに書いてみよう。友達は、どんなことを書いているのかな。話し合いのときに聞いてみよう。

話し合い活動

書く活動

話し合いを通して学んだことをもとに自分の意見をノートに書いてまとめましょう。



Aさんは、理由を付けて意見を述べていたな。Bさんは、数や式を使って説明していたな。二人の意見を参考にしてみよう。



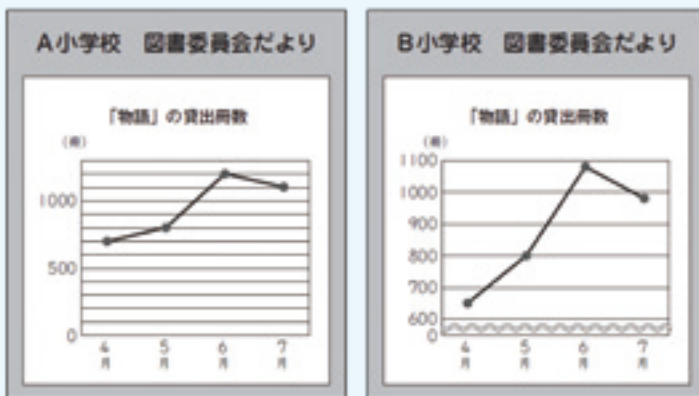
授業の中で、自分の考えを書く活動と話し合い活動に関連付けて行っている場面
「小学校4年 算数 折れ線グラフ」(8時間) 第7時の授業について



本時のねらい

折れ線グラフを的確に読み取ることができる。

各学校の図書委員たちは、読書活動をすすめた成果を表すために、4月から7月までの4か月間の「物語」の貸出冊数の変化の様子を、それぞれ折れ線グラフにまとめました。



平成28年全国学力・学習状況調査 小学校算数B 大問4(3) より

学習活動① 2つのグラフの変化の様子を比較し、1目盛りの違いに気付く。



5月から6月までの1か月間で、A小学校とB小学校のどちらの方が貸出冊数の増え方が大きいでしょうか。
 まず、**気付いたことをノートに書いて**みましょう。次に、書いたことをもとに**話し合います**。



5月から6月の間の貸出冊数の変化を比べると、B小学校の方が、グラフの線の傾きが急に見えるから、貸出冊数の変化も大きいと思います



でも、5月と6月の貸出冊数は、A小学校はおよそ400冊増えていて、B小学校はおよそ300冊増えています。だから、A小学校の方が変化が大きいと思います。

1目盛りの幅が違うから、グラフの線の傾きだけでは、比べられないね。



書く活動

話し合い活動

学習活動② 貸出冊数の変化を比較できるようにグラフを表現し直し、グラフの特徴を話し合う。



2つの学校の貸出冊数の変化は、どうしたら比べやすくなりますか。

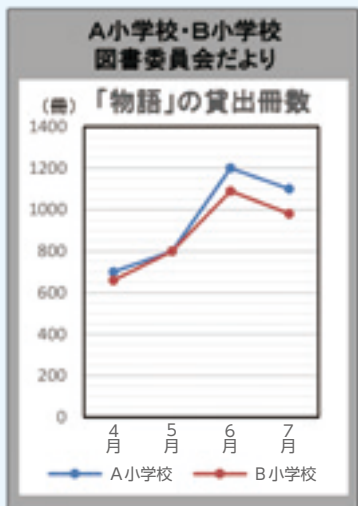


それぞれのグラフの目盛りの幅をそろえるとよいと思います。

それなら、1つのグラフ用紙にA小学校とB小学校の貸出冊数を重ねてかくと、比べやすいと思います。



話し合ったことをもとにグラフを表現し直す



表現し直したグラフをもとに話し合う



5月から6月までの間の貸出冊数の変化を比べると、A小学校の方がグラフの線の傾きが急だから、貸出冊数の増え方が大きいと思います。



グラフ全体を見ると、A小学校の貸出冊数の増え方は大きいけれど、B小学校の増え方はあまり大きくありません。



話し合ったことをもとに、表現し直したグラフから分かったこと、考えたことを**ノートに書いてまとめ**ましょう。

話し合い活動

書く活動

授業では、言語活動を充実させるとともに、引き続き、「ねらいの提示・振り返る活動」と「自分の考えを書く活動」を適切に位置付け、主体的な学習活動をより効果的に展開しましょう！

とちぎの子どもの「確かな学力」向上のために 授業改善に向けた3つの視点

導入

目標（めあて・ねらい）の共有化

- ◇ 先生と児童生徒でねらいを共有し、学習の見通しをもたせましょう。

展開

自分の考えを書く活動の習慣化

- ◇ 自分の考えを書く活動と、言葉で人に伝える「説明」「話し合い」などの活動を相互に関連付けましょう。

終末

振り返る活動の工夫

- ◇ 児童生徒が自己の学びを実感できる時間を確保しましょう。
- ◇ 児童生徒の振り返りから、実態を把握し、授業改善・指導方法の工夫に向けたヒントを見つけましょう。



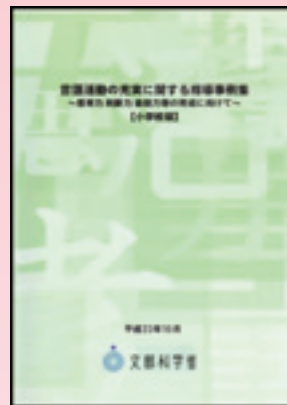
栃木県教育委員会（H27年度）

参考となる資料について

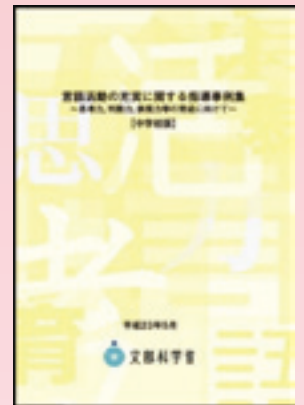
※これらの資料は、それぞれのホームページからダウンロードすることができます。



平成28年度全国学力・学習状況調査関連資料
文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター



言語活動の充実に関する指導事例集
～思考力・判断力・表現力等の育成に向けて～
文部科学省（H23年度）



とちぎの子どもの学力向上を図る
授業改善例

栃木県教育委員会（H26年度）



「主体的に考え表現できる子ども」
を育てるために



思考力・判断力・表現力を育む授業づくり
栃木県総合教育センター（H26・27年度）



学力向上アドバイザーからのメッセージ②

県教育委員会では、平成26年度から、とちぎっ子学習状況調査の効果的な活用や、学習指導に関わる検証改善サイクルを確実に構築・運用するために、10名の学力向上アドバイザーを県内公立小・中学校に派遣してきました。学力向上アドバイザーの2700回程度の学校訪問を通して、組織的に学力向上に取り組み、成果を上げている学校は、調査結果の分析から得られた成果と課題を学校全体で共有し、自校の取組に反映させるなどの共通点があることが分かりました。それらの取組を、学力向上の3つの柱に基づいて、以下のとおりまとめました。各学校の学力向上の取組の参考にしてください。

子どもの学ぶ意欲、学習習慣

1 主体的に学ぶ子どもを育てるために、授業のねらいを効果的に示し、授業のまとめや振り返りをさせましょう。

・「学業指導の充実ー子どもが意欲的に取り組む授業づくりを通してー」(H26.3 栃木県総合教育センター)

2 授業のねらいを達成させるために、自分の考えを書く活動と説明や話し合い活動を相互に関連づけましょう。

- ・「思考力・判断力・表現力を育む授業づくり」【実践編】(H28.3)・【理論編】(H27.3) (栃木県総合教育センター)
- ・「とちぎの子ども『確かな学力』向上のためにー言語活動の充実を図る3つの提案ー」(H28.12 栃木県教育委員会)
- ・「とちぎの子ども『確かな学力』向上のためにー授業改善に向けた3つの視点ー」(H27.11 栃木県教育委員会)
- ・「平成26年度とちぎの子ども『確かな学力』向上を図る授業改善例〔小学校〕〔中学校〕」(H26.11 栃木県教育委員会)

3 子どものよさを認め、言葉かけを工夫することで子どもに自信を付けさせましょう。

・「確かめよう学業指導 平成26年度『栃木の子ども』の学級と学習に関する調査研究』報告概要」(H27.3 栃木県総合教育センター)

教師の指導力

4 学力向上に向けた明確な目標（ビジョン）を全教職員で共有し、組織的に取り組んでいきましょう。

- ・「組織で取り組む学業指導ー学業指導尺度の活用を通してー
平成27年度『栃木の子ども』の学級と学習に関する調査研究(2年次)』の報告」(H28.3 栃木県総合教育センター)
- ・「栃木の『学校力』の向上」(H25.3 栃木県総合教育センター)
- ・「平成26年度学力向上実践事例集ー検証改善サイクルの確実な運用を目指してー」(H27.3 栃木県教育委員会)

5 授業研究会等を通して、学び続ける教師集団を作りましょう。

- ・「平成28年度学力向上実践事例集ー教師の指導力の向上を目指してー」(H29.3 栃木県教育委員会)
- ・「平成27年度学力向上実践事例集ー授業改善を目指してー」(H28.3 栃木県教育委員会)

6 学習ルールを徹底し、互いに認め励まし合える学級集団を作りましょう。

- ・「学級経営のイ・ロ・ハ」(H27.3 栃木県総合教育センター)
- ・「学業指導の充実に向けてー学業指導を全ての教職員が進めるためにー」(H24.3 栃木県教育委員会)

保護者の理解・協力

7 保護者の理解・協力を得るために、学校の取組を積極的に発信しましょう。

- ・「家庭でできる学力アッププロジェクトーとちぎっ子学習状況調査 3年間の調査結果からー」(H28.11 栃木県教育委員会)
- ・「平成26年度学力向上実践事例集ー検証改善サイクルの確実な運用を目指してー」(H27.3 栃木県教育委員会)

とちぎの子どもの「確かな学力」向上のために

～平成28年度全国学力・学習状況調査結果から～

平成28年11月 栃木県教育委員会

この資料は、平成28年度全国学力・学習状況調査の結果について、栃木県(公立)と全国(公立)との比較から分かる特徴をまとめたものです。本資料を活用して、「教科に関する調査」や「質問紙調査」の結果から見られる県全体の成果と課題を把握するとともに、とちぎの子どもの「確かな学力」の向上に向けた指導改善にお役立てください。

1 教科に関する調査の結果から

(1) 各教科の平均正答率

中学校の国語A・Bを除く全ての教科で、全国の平均正答率を下回っており、特に、小学校の国語A、算数A・Bは、2ポイント以上低い結果となっています。

基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるとともに、習得した知識・技能を活用して自ら考え、まとめ、表現する学習活動を充実させていきましょう。



○ 本県の平均正答率

〈小学校第6学年〉

()内は全国(公立)との差

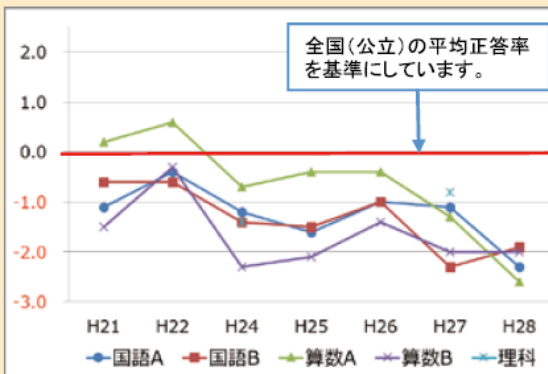
〈中学校第3学年〉

()内は全国(公立)との差

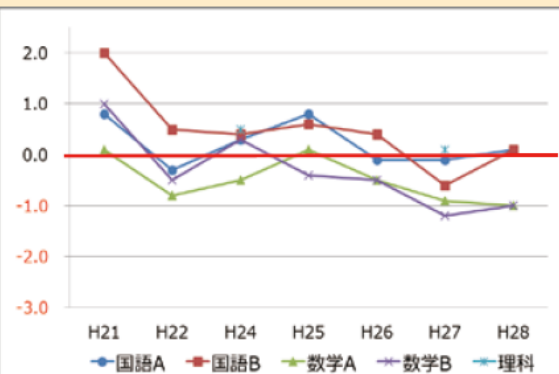
問題	H21	H22	H24	H25	H26	H27	H28	問題	H21	H22	H24	H25	H26	H27	H28
国語A	68.8	82.9	80.4	61.1	71.9	68.9	70.6	国語A	77.8	74.8	75.4	77.2	79.3	75.7	75.7
	-1.1	-0.4	-1.2	-1.6	-1.0	-1.1	-2.3		+0.8	-0.3	+0.3	+0.8	-0.1	-0.1	+0.1
国語B	49.9	77.2	54.2	47.9	54.5	63.1	55.9	国語B	76.5	65.8	63.7	68.0	51.4	65.2	66.6
	-0.6	-0.6	-1.4	-1.5	-1.0	-2.3	-1.9		+2.0	+0.5	+0.4	+0.6	+0.4	-0.6	+0.1
算数A	78.9	74.8	72.6	76.8	77.7	73.9	75.0	数学A	62.8	63.8	61.6	63.8	66.9	63.5	61.2
	+0.2	+0.6	-0.7	-0.4	-0.4	-1.3	-2.6		+0.1	-0.8	-0.5	+0.1	-0.4	-0.9	-1.0
算数B	53.3	49.0	56.6	56.3	56.8	43.0	45.2	数学B	57.9	42.8	49.6	41.1	59.3	40.4	43.1
	-1.5	-0.3	-2.3	-2.1	-1.4	-2.0	-2.0		+1.0	-0.5	+0.3	-0.4	-0.5	-1.2	-1.0
理科			59.5			60.0		理科			51.5			53.1	
			-1.4			-0.8					+0.5			+0.1	

○ 全国(公立)の平均正答率との差(%)

〈小学校第6学年〉



〈中学校第3学年〉



児童生徒に、「確かな学力」を身に付けさせるためには、学校全体で課題を共有して取り組むことが重要です。本資料では、自校の調査結果を授業改善につなげる校内研修の進め方を例示しています。これまでに配布されている「授業改善に向けた3つの視点」などの資料と併せて活用し、校内研修をより活性化させていきましょう。

本資料を活用した校内研修例

〔資料名〕

とちぎの子どもの「確かな学力」向上のために
～ 平成28年度全国学力・学習状況調査結果から ～

STEP 1： 自校の実態をつかみましょう

1. 全国と自校の平均正答率の差を**経年**で見る。

資料(P1)にあるグラフに「全国と自校の平均正答率の差」を記録し、経年で結果の推移を確認しましょう。



2. 全国や県と自校の**正答数分布グラフ**(各教科のページ左上)を比較する。

送付されている自校の正答数分布グラフ【① 調査結果概況(児童)(生徒).xlsx】を印刷し、全国や県の分布と比較しましょう。



3. 各設問の**県平均正答率**や**無解答率**(各教科のページ左下)と比較し、自校の強みと課題を確認する。

県全体の「設問別正答率」の隣に、自校の「設問別正答率」を書き加えることで、比較しやすくなります。



STEP 2： 課題となる設問を取り上げましょう

1. 課題となる設問を**実際に解いてみる**。
2. 本資料や報告書(国立教育政策研究所)を基に、**出題の主旨**や**正答例**、**解答類型**等を確認する。



※ 児童生徒の解答状況に着目すると、**授業改善のヒント**が見えてきます。

※ 調査問題や報告書は、国立教育政策研究所のホームページからダウンロードできます。

<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/zenkokugakuryoku.html>

STEP 3： 授業改善に向けた、具体策を共有しましょう



なぜ、記述式問題で、無解答率が高いのでしょうか？



これから授業をどのように工夫・改善したらよいか、考えていきましょう。

自分の考えをどのように表現したらよいか、
が分からない児童(生徒)がある程度いると
いうことでしょうか？



平成28年度学力向上アドバイザー

川村 滋

綱川 浄恵

戸田 信之

岡村 静幸

渡邊 久芳

新村 純一

青木 勇樹

小堀 良一

星 成雄

齋藤 孝雄

平成28年度学力向上アドバイザー派遣事業

学力向上実践事例集

-教師の指導力の向上を目指して-

発行 平成29年3月

栃木県教育委員会事務局学校教育課 学力向上推進室

〒320-8501 栃木県宇都宮市塙田 1-1-20

TEL : 028-623-3367 FAX : 028-623-3361